

黒い名刺に気を付ける！【短編集】

牡丹えび

魔王様の恋愛事情：前編

魔物の世界、通称魔界。

ここには各ブロック（国）につき、王がいる。その王を束ねているのが絶対的な支配者、魔王陛下。

歴代の魔王の中でも桁外れに魔力が強く、彼はそれ故に長く生きることが決まっていた。

そんな彼は、長く生きるのだからと自分に御褒美を考えた。

.....恋をすること。

人間から見ると些細なことかも知れないが、全ての魔物に平等な愛情を注がなければいけない陛下は、特定に恋することや愛することは本来認められてはおらず、故に彼はその禁忌を破り、恋を欲した。

しかし、彼の恋する相手は彼の自由では決められなかった。

魔王陛下の伴侶、すなわち女王陛下は魔物の中でも最も優れていなければ務まらない。そういう考えが周囲にあり、彼は年頃の魔物の中で最も優れたものを女王に迎えざるを得なかった。

今更、文句を言えるものでもない。

魔王陛下は選考に口を挟まず、執事のアルバートが全てを取り仕切った。

恋を望んでいても、陛下は何処か冷めていた。恋が出来るはずもないと、心の中で諦めていたからだ。

「おれ、女王陛下になりたいです」

前に彼に向かって宣言した子供が、彼の言った通りの条件を満たしてやってくることは、正直期待してもいなかった。いや、忙しい公務のさなかで忘れていたと言ってもいいかも知れない。

「よっ！ やっと会えたな」

伴侶選びも佳境に入り、僅か数名が残った時点で初めて彼の目の前に成長したあの時の子供が現れた時、彼は少々驚いた。

「なんだ、驚かないのか」

「アイデア・イル・グラスィーアール。私語は慎みなさい。魔王陛下の御前ですよ」

イル、がつくのは貴族の証拠だ。そして彼の姓は死に神の一族の中でも名家であることを表している。しかも彼は嫡男だ。

「.....お前が嫁いだら、家の者は困るのではないか」

「そうだなあ。跡継ぎだからな。でも姉さんや妹がいるから平気だろ。それより」

俺はあんたに娶られたいと、アイデアはコーンフラワーブルーの瞳を輝かせて笑う。青い瞳はキラキラしていて、陛下は面白いやつだと思った。

「私の妻は、なかなか遣り甲斐があるぞ」

「だろうな。なんたって魔物全員の憧れの的に嫁ぐんだから、毎日殺されそうになるんだろう」

歴代魔王の伴侶で、命を全うしたものはいない。皆が皆、その立場を妬むものによって闇に葬り去られる。しかし魔王たちは伴侶を守ろうとはしない。そうすればするほど、周りの妬みが酷くなるからだ。

結果、魔王は滅ぶ時、いつも独りなのだ。無から生まれ、無に還る魔王はいつでも孤独だった

。

「でもさ、あんたは俺が殺されかけてもいいって思うくらい、俺を大切にしてくれるんだろ？」

アイデアは彼が伴侶に恋をした場合、そうしてやろうと思っていることを言い当てた。

「あんたは、俺のこと大事にしてくれるよ。絶対」

まるで確実に自分に恋をするように、アイデアは笑った。

「さあ、どうだろうな……」

魔王陛下はその時、鼻で笑ってあしらった。

確かにアイデアは美しく、教養もあり、武芸にも長けていて完璧だった。実際、その後の勝ち抜き試合で見事に女王の座を射止めている。

だが、それだけだ。彼の心は優れているものに恋をするというような、簡単なものではない。優れているとなれば魔王という自分より優れているものは魔界にはいない。

「私に、恋をさせてくれるのだな……？」

「勿論です。旦那さん」

誓いのくちづけを交わしても、魔王陛下は特に嬉しいとは思わなかったが、何となく、心がいつもと違う反応をしていた。

それは、その後に起こる出来事を予知して心が信号を送っていたのかも知れない。

隣に立つ青年が、自分の唯一無二の愛おしい存在になるという信号。

アイデアは締め付けられた純白のコルセットを己の爪で容赦なく引き裂いた。

「いっでええええっ。うわっ、痕になってるよ、痕！くっそ。あいつら、言うに事欠いてキューキュー締め付けやがって」

ドレスは腰回りが命ですからと、アイデアの支度に取りかかったメイドたちは彼をコルセットで動けないくらい締め上げた。

女王の権利を勝ち取ってから、コルセットについては実地で勉強をしていたが、ブラコンの姉が締め上げるのと、魔王陛下を盗られてしまったとアイデアを憎むメイドたちでは力が違う。

「あー、やっと息が出来るわ……」

深呼吸三回。伸びをする。ぽきぽき、どっかから音がした。

引きつったような痕を姿見で確認して、アイデアは嫌そうな顔をしたが直ぐに表情を改めた。

ようやく、あの日に恋をした魔王陛下の隣にいる権利を勝ち取ったのだ。誰に頼ることもなく、それこそ最後の勝ち抜き戦は殺してはいけないというルールだったが、殺し合いのような鬼気迫ったものだった。

最後に戦った名門貴族の優男は、流石に剣技が巧く、アイデアは利き腕が使えなくなった。

魔物は首を完全に落とすか、その職務を放棄するかのどちらかで死ぬ。

最終的には力任せに蹴りを入れ、怯んだ隙に相手の喉へ剣を突き立て、殺すぎりぎりで勝ちをもぎ取った。

「スマートな勝ち方ではない」

喉に剣を突き刺したまま、魔王陛下の第二后に決定したアデリシン・イル・ブリュームはそう言って嫌な顔をした。

アイデアより細身で頼りなげに見える青年だが、前の試合では大男の胴体を一瞬で薙ぎ払うという力業も見せている。

「勝ち勝ちだ」

「言ってる。……お前が早く死ぬことを祈っている」

喉の剣を抜いて止血をしながら呪いの言葉をはくアデリシンを思い出し、アイデアはにやっと笑った。

ふと、メイドが淹れた飲み物に手をとる。匂いをかいで、近くにあった植物にかけてみる。植物はあっという間に溶けた。

「危ない危ない」

魔王陛下の城にきて未だ数時間だと言うのに、既に誰かが自分を殺そうとしている。

そのことは、アイデアにとって苦難や苦痛ではない。むしろ、自分が魔王陛下の寵愛を一身に受けても支障がない立場だと言うことを実感させてくれる確証だった。

歴代の女王陛下は命を狙われて辟易していたことだが、歴代の女王とは違うのは魔王陛下が、少なからず自分に関心を寄せているということだった。

魔王陛下の伴侶は、陛下を支える杖のようなもの。陛下はその立場から伴侶に特別な感情は持たない。伴侶はどんなに陛下を慕っていても、その見返りが無い。いくら愛しの陛下のそばにいられるからと言っても陛下からの見返りが無いだけではなく、命を狙われる日々になるのは参ってしまう。

しかし、「恋がしたいのだ」

魔王陛下は幼い自分に言っていた。

だから魔王陛下が自分に恋をすれば、命を狙われるなんてことは些細なことだとアイデアは思っている。

彼の関心が自分であればアイデアは満足だった。

「新婚初夜って、緊張するな……」

用意されていた服に袖を通し、身なりを整えたアイデアは彼の待つ部屋に向かった。

歩きながら、「……この場合、俺が抱く方だよな……？いや、あっちが抱く方か……？」

尊い御身の魔王陛下を喘がせていいのだろうか、無駄かつ下品な思案がぐるぐる回る。

実は陛下には軽口を叩いているが緊張してしまって、正面から見据えた記憶があるのは幼い頃だけだった。

幼い頃、花畑で出会った美しい青年。

魔王陛下との思い出はアイデアの中で特別な輝きを放っている。なんと言っても彼のために、彼だけのために五百年以上頑張ってきたのだ。

他の女王候補だったやつとは年季が違うとアイデアは自負している。血の滲むような日々だったと言ってもいい。それくらい、真っ直ぐで純粋な気持ちを持って突き進んできた。

「……下手だったらどうしよう……」

初夜については一応、訓練所で勉強はしている。モテるアイデアは挿入こそ遠慮したが、男女共に誘ってくるものが多く嗜み程度に相手をしたこともある。

しかし、相手は魔王陛下。勝手は違うのかも知れない。

足を踏み出すにつれて自信がなくなっていくのを感じた。

正直、少し怖じ気づいてる。

「あー……、俺がこんなでどうする！」

自分に活を入れ、アイデアは扉を開けた。

重い扉を開けると、「入れ」

魔王陛下はひとりがけ用の豪華な椅子に座ってじっとしていた。虚空を見詰めるような瞳には何の感情も浮かんでいない。

「よくきたな」

言葉では労ってはいるが、感情が伺えない声にアイデアは不自然なものを感じた。

「……熱でもあるのか？」

「いや。私は病にはならない」

魔王陛下はこの世界でただ独りの魔人。たとえ病気になったとしても治療法に前例がない。

否定されてアイデアは安心したが、「あの……、よろしく……」

流石にこれからすることに対して恥ずかしさが出てきて声が小さくなった。

「お前に任せる。好きなようにしろ」

魔王陛下がベッドに座り、手招きするのでアイデアは従って隣に座った。

見詰め合って、自然な動作でキスをする。

「……………」

くらくらするほど、甘い。

座っているのに腰が抜けそうになる。乱れそうになる息を整えながら、為すがままになっている魔王陛下の口腔を貪った。

どこもかしこも純潔であるはずの陛下は応えるのが驚愕するほど巧く、我を失いつつあるアイデアの背中に手を添えた。

暫くキスをしていて、身体が熱くなるのに任せて押し倒すと、陛下は真黒の瞳でアイデアを見上げた。

その瞳を見て、アイデアはまたも不自然なものを感じた。そっと、頬に触れてみる。

「……冷たい」

アイデアは悟った。

「あんた、何も感じてないだろ」

「……ああ」

ハッキリ頷かれて、アイデアは彼の上に崩れ落ちた。

「どうかしたのか」

「そうだよな。何も感じないわけだよな。あー……、俺としたことが。早まったわ……」

魔王陛下は訳がわからないという顔をした。その白い額に、アイデアはキスを落とした。

「俺の胸に触ってみてよ」

「……鼓動が凄まじいな……」

「それはね、あんたに恋をしていて、あんたとキス出来てドキドキしてるから。でも、あんたは違うんだよね。俺に恋をしていないし、だからキスされてもドキドキしない」

それどころか何も思っていないと、アイデアは溜息をついた。

落胆させたことを済まなく思ったのか、魔王陛下は申し訳なさそうな顔をした。

「婚姻を結んでも、その……あまり肉体的な行為については歴代のものは望まれない限りしなかった。伴侶たちも積極的ではなかったらしい。私も積極的ではなかったことは確かだ。許せ」

「いや。謝ることじゃない。魔王陛下は抱かれる方ではないと思うし、そもそも恋をしてないあんたには何をしても感じるものはなさそうだ」

恋をしたいと望む魔王陛下。

自分は女王になれた、好きな人に近付けたというだけで舞い上がって、彼の気持ちを考えずに先走ってしまった。

アイデアは陛下の身体を抱き締めた。しなやかで触れ合いに慣れていない身体からは蜜のような甘い香りがする。

「ゆっくりいこう。もう、あんたが恋をする可能性があるのは俺だけなんだから、焦っても仕方がない」

「そうだな。私の花嫁は、お前だけだ」

「あんたは俺に恋をするよ。絶対。でも無理矢理じゃない。俺が幼い時にあんたに恋をしたように、運命めいた恋をするように、俺は頑張る」

「……期待している」

小さく笑った魔王陛下は、それでもアイデアを抱き返すことはなかった。

生まれて千年、魔王陛下はずっと恋に焦がれていた。更に数百年、伴侶を待っていた。

「恋をさせる」

初夜が見事な失敗に終わってから、アイデアは宣言した通りに魔王陛下にアプローチを始めた。

「お疲れ様。公務、終わったか？」

執務室に顔を覗かせたアイデアは頷く魔王陛下に笑みを浮かべ、「今日は常春の庭に行こう。新しい花が咲いたんだ」

堅苦しい書類ばかり見ていた目を休ませるためにと色々なところに連れ出してくれる。

魔王陛下は自分の城の敷地からは滅多なことでは出られない。夜会や重要な用事以外で魔界を出歩けば、魔物たちを不安にする。

「明日は、……思い切って世界を変えてみようか」

世界を越えれば魔王陛下の魔力も多少は制限される。その美しすぎる容姿にも目くらましが使える。

アイデアの提案は魅力的だが「お前を娶った直後にこの世界を無闇に抜けることは出来ない。お前の一族を狙うものが行動を起こしては困る」

魔王陛下はお茶を飲みながら断った。

アイデアの一族は名門の貴族で武力もある。それでも、女王の出身というだけで周りからはやっかみを受け、謂われない喧嘩を売られることもある。伴侶の家を表立って守ることは鼻真になるので出来ないが、陛下はその存在だけで抑止力になっていた。

「大丈夫だよ。ロードライトもいるし。あいつ凄く強いんだから」

ロードライト・イル・グラスィーアールは死に神の家でも始祖の生まれ変わりかと言われるくらい、純血種に近い魔物だった。

始祖と同じ紅茶色の瞳と髪をしており、発展途上ながらその魔力は軍一隊を敵に回しても余裕で薙ぎ倒すくらいだった。

因みに、ロードライトは後に名を「神坂築（カミサカキズク）」として人間の世界で働くことになる。

「……あれは未だ幼いではないか。お前を取り上げて、ロードライトにも何かあったら顔向けが出来ない」

首を振る魔王陛下にアイデアは肩を竦めた。

「落ち着いたらどっかに行こう。新婚旅行だ」

その前に恋してもらわないとなあと、アイデアは花を押しつぶすように寝転がった。

「恋というのは、どういうものなのだ……？」

彼はそれを望んでいたが、実際にはどのようなものかはわからなかった。ただ禁忌の感情というのが気になって、自分に与えることにしただけだ。

「全知全能の魔王陛下でもわからないことがあるんだな。……うん、言葉では表すのが難しいな」

喜怒哀楽、以外の感情。それ以外を魔王陛下は把握していない。

「初夜の時、お前の鼓動が早かった原因だな。鼓動が早くなることを恋と……」

「身体の反応的にはそんな感じ。どうしていいか、わからなくなるんだ」

相手のことを思うと、身体が熱くなってどうしようもなくなる。何かが溢れて、抑えきれない。その溢れるものが、「愛おしさって、今のあんたにはわからないか」

アイデアは苦笑して陛下の頭を撫でた。

「……………」

魔王陛下は不思議な気持ちだった。彼は頭を撫でられた経験はない。それどころか、彼に触れたのはアイデアが初めてだった。

婚姻の時のキスも、初夜の時のキスも、触れた時はそれほど感じるものはなかった。

なのに、ふとした時に触れられると、身体の何処か、奥深い場所がゆっくり音を立てる。

「あたたかい……」

音を立てた場所、胸に手をやると少しだけ暖かく感じた。不思議なことだと魔王陛下は小首を傾げた。

「どうかしたのか？」

「いや。……お前に触れられると妙に心地いいと言うか、変なものを感じる、……気がする、ような……」

「曖昧だな。大丈夫か」

頷きながら、魔王陛下はアイデアを見詰めた。

光を吸収するような真黒な瞳はどの宝石よりも美しく、それに映るのはアイデアひとりだった。その事実、彼に恋をするアイデアは喜びを覚え、零れるような笑みを見せる。

「どうしたのだ」

「あんたの目に、俺が映ってるなって。あんたが俺しか見てないってことが、凄く嬉しいんだ」

「今いるのはお前だけなのだから、当然ではないのか」

まあそうだけどね、とイデアは苦笑する。

魔王陛下は何がおかしいのかわからないが、また頭を撫でられ、頬に軽いキスをされて追求するのをやめた。触れられたところに少しの熱を孕み、それの方が気になった。

「お前といると、不思議なことが起こる」

この世界の全てを知っているはずの魔王陛下も、恋を知らない。その前に、自分の身に起きているこの出来事が説明出来ない。

「これはこれで、楽しいものだ」

魔王陛下は真っ赤なルージュの引かれた唇に笑みを乗せた。

魔王様の恋愛事情：後編

アイデアを娶り、五十年が過ぎた。その間、二人は穏やかに過ごしていた。

「今日も遅くまでかかるのか？」

問いかけに、魔王陛下は首を振った。夫婦らしくベッドを共にするが、アイデアは頬への軽いキス以外は彼に触れようとしなかった。

自分を欲しているのであれば、抱かれるのだなと思っていた陛下にアイデアは「心が伴わない行為は不毛だ。あんたが俺に恋をして、抱かれてもいいと思った時にするから今はいい」

そう言って、身体を求めることはしなかった。

これは伴侶としてはかなり異例なことだった。本来、寵愛を与えることが出来ない魔王陛下が伴侶に与えられるのは、極上の蜜のような快樂だけだからだ。求められれば必ず応じる。積極的ではなくても陛下は本能的に皆が皆、床上手だった。

「お前は変わっているな」

「あんたが感じないと意味がない」

アイデアは常に、魔王陛下を優先させた。伴侶として陰ひなたになることは当然のことだが、彼は少し違う。

心まで優しく、包み込もうとしてくる。それが少し、くすぐったいと陛下は最近感じるようになってきた。

出会って数百年、幼かった彼からの感じられなかった未知の感情に陛下は表情にこそ出さないが戸惑いもあった。

そんな矢先、「夜会の出席。……俺も行くのか」

「私独りでもかまわないが」

「いや、行くよ。女王を迎えた魔王陛下が一人で出席って言うのは体裁が悪いだろ。ダンスくらいなんてことないし、俺はあんたと違って常に暇だから交友関係を広げるのもいいかも知れない」

基本的に、魔王陛下のためだけにいる女王陛下には仕事はない。居城に訪れるものをもてなすのも陛下がこなし、女王はメイドのようにお茶を出したりするだけで表には出られない。従ってアイデアは伴侶にかかわらず煌びやかなこととは縁がなく、ここ五十年は暇つぶしをひたすらしている状況だった。

「友人でも出来ればいいが」

「そうだな。って、難しいと思うけど」

女王陛下を憎みこそすれ、友人になろうと思う魔物はいない。婚姻を結び、たった五十年。その出来事に血の涙を流し、悔しがった魔物の遺恨は未だ根強い。

「せいぜい、死なないように頑張るさ」

きざに笑ってみせたアイデアに、魔王陛下も苦笑した。

そして夜になり、揃って出掛けると当然注目の的になる。

「居心地が悪いな、やっぱり」

殺気走った視線を向けられて、アイデアは苦笑するしかない。エスコートする魔王陛下は平然としている。

「魔王陛下。私と是非一曲、踊ってくださいますか」

優雅な音楽が流れているさなか、魔王陛下は手を差し出され、その手をとった。

彼は、アイオライト・イル・ドゥラグルル。第三后だった。

迷わずダンスに興じる陛下を見て、アイデアは内心面白くない。彼がアイオライトに心を傾けるはずもないとわかってはいるが、未だに自分にも心を傾けてはいないという事実がアイデアを焦らせていた。

「魔王陛下。……アイデア女王陛下との新婚生活は順調ですか？」

「仲違いはしていない」

淡泊な答えに、アイオライトは苦笑した。

「陛下。失礼ながら、そのご様子だと尊い御身は初夜を迎えられても未だ純潔のようですね」

「そうだが」

「下世話なことで申し訳ありませんが、アイデアは直ぐに手を出すと思っていました。……何か問題でもおありなのですか」

踏み込んだ質問をしているが、魔王陛下は平然と「実を伴わない行為はしたくないそうだ」

そう、答えた。アイオライトは笑みを深くする。

「では陛下は永遠に純潔ですね。恐れ多くも陛下の御心を奪う不届きなものは現れそうにありませんから」

「……そうだろうか」

「そうです。私は女王陛下になれなくて意気消沈しておりましたが、陛下の純潔が永遠に守られるとわかり、安心しました」

明るい声で囁くアイオライトに抱き締められ、魔王陛下は何かが違うと思った。

何か、ではなかった。自分を抱き締める腕、その強さや優しさ、温もりなど全てが違う。

魔王陛下はじっとアイオライトを見詰めながら違うことを考える。初めて自分に触れた、アイデアの緊張した温もりが急に恋しくなった。

「后よ。私は恐らく、もう妻以外とはダンスを踊らないだろう」

「何故ですか？私には何か、無礼を働いてしまいましたでしょうか」

「いや。お前は何もしていない。私の心の問題だ」

「陛下の御心の……。後の私とも踊ってはくださりませんか」

アイオライトは魔王陛下の頬に触れ、唇を寄せる。

観衆は息を飲んだ。本来なら女王陛下にしか許されないことだからだった。しかし、仮にも后であるアイオライトを誰も咎めることは出来ない。

咎められるのはただひとり、「おい、なに流れに乗ってさりげなく不届きなことをしようとしてんだ、てめえ」

女王陛下アイデアがこれ以上ない不機嫌な声と顔で割って入った。

「別に良いではないか。私は后だ。陛下の頬に触れるくらい」

「よくねえよ。早くどっかに行け、くず」

明らかに敵対心を燃やしているアイデアに、アイオライトは数十年分年上なだけに余裕で笑っている。

「言葉が悪いな。……陛下、このような品のかけらもない言葉遣いのものが伴侶でよろしいのですか？今からでも遅くはありません。再選考をお勧めいたします」

「うるせえ。黙れ、間男」

アイデアがまとっている魔力を毛羽立たせるように不機嫌になっていくさまを、魔王陛下は観察していた。

彼の妻は従来から、あまり言葉遣いが綺麗な方ではない。出自の割に砕けているし、いったい何処で覚えてきたのかと思うくらいの俗語も使う。それを、彼は一度も注意しなかった。

関心がないからではなく、それは賑やかな音楽のようで耳が楽しいと訴えていたからだ。妻の澄んだテノールは心地よかった。

それは今、嫉妬の色に染められてより魅力的に彼の耳を打っていた。

「我が妻よ。お前は后が私の頬にくちづけるのが嫌か」

「当たり前だろ。あんたの服で隠れていない部分に触れていいのは俺だけだ」

傲慢に言われ、魔王陛下の中で何かが動いた。

多分、これは喜びと同じ感情。しかし少し違う。この得も言われぬ、蕩けそうなものはなんだろうか。

陛下の心知らずの後、アイオライトはアイデアを鼻で笑った。

「なんて狭量なんだ。それでよく女王が務まるな。陛下の御心を与えられない身の癖に、そのようなことでは自滅するぞ」

「……ご心配なく。自滅することは覚悟の上だ。俺は旦那さんを愛してるから、自滅してもかまわない」

アイオライトから魔王陛下を奪い返し、身の内に抱いたアイデアの声は少し揺れていた。

その時、陛下は初めてアイデアの不安を知った気がした。

恋をして、好きで、愛している存在から何も与えられない不安。悲しみが、アイデアをどれだけ苛んでいたか。

自分が恋をしていないと、彼に痛感させるたびに彼はどれほど苦しんだのだろう。

アイオライトの言う通り、アイデアは自分を想う心で自滅してしまう。恐らく歴代の伴侶は皆、同じような道を辿ったのだろう。

恋がしたいと、わがままを言った自分に恋をした青年を、そんな目に遭わせていいのか。

「アイデア……」

魔王陛下は初めて、アイデアの名を呼んだ。呼ばれたアイデアはびっくりして視線を向ける。驚きと喜色の混じった表情に、陛下は初めて愛おしさを覚えた。

愛おしさ。

追い求めていたものを、確実に感じた陛下は笑みを浮かべる。それはアイオライトを始め、観衆が息を飲むほどに美しく、愛おしいものを想う艶を帯びた笑みだった。

「これが運命めいたものかはわからないが、私は、……どうやら恋をしているようだ……」

吐息のように囁くと、アイデアは真っ赤になった。驚きすぎたのだろう、身体を抱く腕の力が抜けている。

「まじかよ……」

確認をとられて頷くと、これ以上ないくらい力一杯抱き締められ、初夜の時から唇と唇のキスをされた。

その夜、魔王陛下はアイデアに初めて身を任せた。

初夜の時のような、何の感情も抱いていなかった時とは違う。触れられた部分が発火してしまうような、しかし甘美な体験だった。きっと、このように思った魔王は自分だけだと思う。

「これからもっと俺のことを好きにさせてみせるよ」

素肌を触れ合わせ、アイデアは愛おしそうに魔王陛下を見詰めた。心地よい体温に陛下が眠りかけた時、思い出したように「あ。忘れてた。そう言えばさ」

あんたの名前はなんて言うんだ、と妻が言うので魔王陛下はつい、声をあげて笑ってしまった

。

いつもの朝、手代木篤志（テシロギアツシ）は目覚ましは鳴らない状況でも起きられるようになっていた。

「……何時だろう……」

自分の感覚を信じるなら、恐らく六時半くらいだろう。

眠っている傍らの恋人を起こさないようにベッドを出る。凍った床に足をとられないように、スパイクのついた靴で室内を歩く。

部屋はまるで雪山にいるかのように寒く、所々に本物の雪が積もり、床は氷で覆われていた。

因みに、手代木の部屋は以前はマンションの八階だった。しかし、恋人と肌を重ねるたびに部屋が「こうなってしまう」ので急いで安い平屋に引っ越した。

一軒家を持つには彼は未だ若かったが、学生時代からバイトをして貯めていた金と、まあまあいい給料のおかげでローンはあるものの、購入に躊躇するものでもなかった。それに、彼の恋人が「マンションにいられなくなったのは自分のせいだ」と気にして頭金を出したので金銭的には余裕がある。

最初、殆ど同棲ながら恋人に頭金を出させると言うことに手代木は抵抗があった。しかし、恋人は気が弱いのに頑固なところがあり、手代木に内緒で頭金を振り込んでしまっていた。

「……朝……」

「おはようございます、雪人さん」

昨日の愛し合った疲れが残っているのだろう、小さく欠伸をしている恋人の雪嶋雪人（ユキシマユキト）は笑顔に向けた手代木に少しはにかんで笑った。

透けるように白くなめらかな頬に赤味が差し、何とも言えず可愛らしいが雪人は手代木より数百歳も年上だった。

雪人は、人間ではない。雪の化身で、冬の王。魔物である。

更に同性と言うことで二人のハードルは成層圏よりも高いものだと思われたが、二人はなんとか恋人同士になれた。

「部屋の掃除しないと」

手代木の部屋が真冬の雪山になるのは、雪人の魔物ならではの能力にある。

彼は羞恥心が高まると本来持っている魔力を制御出来ず、周りを氷で覆ってしまう。おかげで愛を身体で確かめ合うたびに部屋は雪山、電化製品は破壊され、室温は当然氷点下になる。

何の能力もない手代木がその中でも服を着ずに雪人と行為が出来るのは、雪人を雇用している会社の社長、神坂築（カミサカキズク）が手代木に防寒対策のブレスレットを与えたからだ。

一方、雪人の方には手代木を受け入れても溶けて消滅しないように、これまた神坂がブレスレットを与えている。

神坂は狙ったのか、二人のブレスレットは金色と銀色ではあるが同じデザインでお揃い。二人はそれを結婚指輪の代わりだと思って大事にしている。

「雪人さん、今日は一緒に帰れないんですね」

学生時代からの趣味である料理に勤しみながら手代木が振り返ると、「はい。あと、今日は夕食を一緒にとれないです」

雪人は律儀に昨日と同じことを言う。

「弟さんがくるんですね。雪人さんにそっくりな弟さんだったらきっと美人だろうなあ」

「僕の容姿については自信がないんですけど、弟は本当に可愛いんですよ。性格がクールなのでよく説教をされますが」

少々ファミリーコンプレックスの気がある雪人はにっこり笑う。その笑顔は可愛いが、自分に対してではないと思うと手代木はちょっとした嫉妬を覚えてしまい、そんな自分は恐ろしく狭量でどうしようもないと苦笑してしまった。

「参ったな。雪人さんは王様で、色んな人が好きだって思ってるはずなのに、俺は直ぐに焼き餅を焼いてしまう」

「焼き餅、ですか？」

不思議そうに見ている雪人に、手早く盛りつけをした手代木は素直に頷いた。

「僕が好きなのは、手代木さんだけです」

当たり前のように雪人が言うので手代木は少し照れてしまい、けれど嬉しくて彼の頬にキスをした。部屋に軽く雪が舞う。

「今日は向こうに帰るんですね。久し振りだし、ゆっくり羽を伸ばしてください」

自分と恋人同士になって、雪人は自分の国に帰る時間が減っている。特に夜は自分の部屋で過ごすことが多くなった。

未だ出来たての恋人同士では当然のことだが、男同士ということもあり、毎日愛し合っている雪人の負担は溜まる一方だ。

正直、手代木は自分から雪人を離すことが出来ないのに、彼がこういった用事で離れることにほっとするところもあった。しかし寂しいのも事実だった。

「あの、早く帰ります。出来るだけ……」

キスの余韻で未だ羞恥に頬を染めている雪人は手代木のシャツの端を握って俯いた。

「早く手代木さんに会いたいので、早く帰りたいです。……駄目ですか……？」

それは凶悪的な可愛さだったので目眩を覚えつつ、「雪人さんが今まで男を知らなかったことが本当に奇跡だと思います」

手代木はそんなことを呟いて本当に蹠踉めいた。

昼休みに入り、終業の挨拶をして雪人は約束の喫茶店にいた。

以前弟に会ったのは何年前かと思って数えてみたら、ゆうに五十年は顔を見ていない事実には驚かされた。

魔物は長く生きる故に時間感覚があまりない。時間は法として決められているが、ほぼアバウトだった。

しかし、生真面目な弟は時間きっちりに現れた。

「……………」

どちら様ですか。

雪人は自分の前に当然のごとく座った青年を見て、その問いが寸前まで出なかった。

「えっと、こっちでは雪嶋雪人って言うんだっけ。……兄さん？」

「……………」

問いかけるように見詰められても、雪人は未だ呆然と青年を見ていた。

雪人の弟は、日本人名を雪嶋砂雪（ユキシマサユキ）と言う。

砂雪、というのは砂のように細かくそれでいて雪のような弟の繊細な容姿から神坂がつけた名前だった。

しかし、「兄さん？」

目の前に座る青年は、およそ繊細さからは掛け離れていた。

澄んだ声はしているが、アルトだったのは力強いテノールに変わり、整った容姿をしているが女性にも見間違えうくらいだったものは、男らしい美丈夫に変わっていた。

自分をまじまじと見詰める兄の様子に気付いたのだろう、砂雪は照れ臭そうに笑った。

「俺、随分昔と違っちゃっただろ。自分でも驚いてるんだから、長いこと会わなかった兄さんが驚くのも無理はないよ」

「……あ、うん。いや、御免。僕の中の砂雪が何処にもなかったから驚いた。でも、よく見ると」

何となく、誰かに似ている。

雪人は思い返さなくてもそれが自分の恋人だと一発でわかった。僅かに頬が熱くなるのを感じた。

「どうしたの、兄さん。俺が格好良くなったから嫉妬してる？」

「昔はそんな軽口は叩かなかったよね。どうしちゃったの、お前」

「俺も考えたんだよ。兄さんに相応しくなるためにはどういう男になればいいかって。今までは堅かったし、クールって言う印象で周りからは遠巻きにされてた。でも、それじゃ駄目なんだ。兄さんに相応しいのは社交的で、明るい男だって考えた」

砂雪は口べたではないが、何処か冷たい。以前の彼が心を開いていたのは雪人か、妹くらいだった。

それが話によれば、仕事で赴いた世界で恐ろしいくらい的人数と交友を持ち、社交性を高めたいらしい。

色恋沙汰も開けっぴろげに話され、人間の世界に出向して百年が経っているのに手代木ひとりとしか関係を持っていなかった雪人は兄として悔しいのか恥ずかしいのかわからなくなった。

「それだけモテるなら婚姻はどうするの。国ではしないんだろう」

砂雪が出向しているのは精霊の世界。婚姻の相手に不足なしと雪人は思っていたが、「いや、婚姻は国ですよ。相手がいるし」

と、意外なことを言った。

砂雪が婚姻を意識するくらいの雪女が、果たしていただけるかと考えて、思い当たるものがない。

国にいた時の彼は本当に生真面目で他人を寄せ付けるようなタイプではなく、交友関係も希薄で親友もいるのかいないのかという状況だったのを思い出した。

そんな弟が一大決心の婚姻を考えるほどになっているとはと、年月の流れにひたすら感心する雪人である。

「どんな子かな。僕は知っているかな。雪女に知り合いが少ないから言われてもわかるかどうかわからないけど」

「……雪女に興味ないよ」

忌々しそうに砂雪は吐き捨てた。

彼は自分を捨てた母親、つまり雪女に並々ならない恨みがあるらしく好意を寄せる雪女をこっぴどく振っている。

その過去を雪人は思い出し、「雪女に興味がないってことは、男？……僕は、性別にはこだわりのないからかまわないけど……」

手代木と付き合っているのでとやかく言えたものではない雪人が頷いていると、「男で、身内。今、俺の前にいる」

砂雪は笑顔で「兄さん、俺と婚姻を結んでください」

雪人の思考をフリーズさせた。

今夜は雪人がいないとわかっているのに、食材を買いすぎた。

手代木は早い段階で自立して独り暮らしをしていたので、こういう自分がちょっと不思議だった。雪人がいる生活が普通になってきていることに、決まった恋人がいなかった彼は新鮮さや気恥ずかしさを感じる。

派手な容姿をしているので昔からよくモテた。入れ食いと言っても過言ではない。それが祟ってか、雪人に一目惚れした時はどうやって振り向いてもらおうかわからず戸惑った。

しかし両想いになり、今は幸せいっぱい怖いくらいだ。

「早く帰ってくるなら寝ない方がいいよな」

鼻歌を歌いながら歩き、ふと向かい側の喫茶店の店内を見た。

「雪人さん……？」

視力はいい方ではないが明らかに恋人で、そして明らかに表情がいつもと違う。酷く驚いているようで、顔色が悪かった。

「なんだ、あの男」

雪人の向かい側にいる男は真剣な表情で何かを言っている。よく見ると、テーブルに乗せられた雪人の手をしっかりと握っているではないか。

今朝、狭量だと自分でも呆れたばかりだと言うことをすっかり忘れた手代木は凄まじい速さで喫茶店に向かった。

「雪人さん！」

手代木が飛び込んだのと、「婚姻なんて出来ないよ！」

雪人が思わず叫んだのは同時だった。

「……………」

手代木は雪人を見詰め、雪人もいきなり乱入してきた彼を呆然と見詰めた。

「てしろぎ、さん……」

「雪人さん、どういうことですか。弟さんと会うって言ってたのは嘘なんですか……？」

雪人と座っている男は彼とは似ても似つかない美丈夫だった。

「こいつ、誰？兄さんとどういう関係？」

「え？」

今、兄さんと言ったか。確かに言った。ということは、と手代木は雪人に目で説明を求めた。

雪人は頷いて「手代木さん、この子は僕の弟です。砂雪と言います。……こんなに似ていないんですけど、本当なんです」

可愛いという雪人の表現からは掛け離れた男をまじまじと見た手代木は、暫く口を利くのを忘れた。

「で、あんた誰」

「砂雪、失礼な口を利かない。この人は僕の、……恋人だよ」

「はあっ？」

雪人としては恋人と宣言するために相当の勇気と羞恥心が募ったのだろう、喫茶店内があっという間に雪山のような寒さになる。一方、砂雪は一気に怒りのような感情が沸き起こったのだろう、彼は怒りで能力が暴走するらしく、室温が氷点下に達した。

「こらこら～、兄弟喧嘩か。馬鹿者ども～」

二人を我に返らせたのは突然現れた神坂だった。

気がつけば、周りの時が止まっている。彼は的確にチョップを入れて双方を気絶させ、「場所を変えましょう。一時間五万円で提供します」

明らかに暴利であろう金額を提示して頂く手代木も引っさらい、氷で覆われた喫茶店をあとにした。

いたるところが真っ白な、扉が一つしかないその空間は以前訪れた雪人の部屋を思い出させた。

「兄さん、どういうこと。人間が恋人って本当なの？」

知らず正座をしまして俯いている雪人はそれでもハッキリと頷いた。

砂雪は鬼のような顔で手代木を睨み付けた。

「あんた、うちの兄さんを誑かしてどういうつもりなんだよ。たかだか人間が、冬の王である兄さんを恋人にしていいと思ってるのかよ。何か弱みでも握ってるんじゃないだろうな」

「砂雪、なんてことを言うんだ。彼は僕の身分とか関係なく付き合ってくれてるんだよ？それに凄くいい人だよ」

「兄さんは黙ってて。あんたに訊いてるんだよ」

黙っていた手代木は砂雪に意見を求められるまで、雪人が浮気をしていたのではないかという自らの大きな勘違いを心の中で反省していた。あとで雪人に正直に言って怒られようと誓った。

「……雪人さんが一般と同じ身分じゃないって言うのは、一応はわかっている、つもりかな……」

「はあっ？つもり、じゃない！あんた、一国の国王と付き合ってるのにそんなに軽いのかよ！ふざけるな、冗談じゃない！兄さん、なんでこんな軽い男と付き合ってるんだっ！」

部屋がみるみるうちに雪山のようになっていく。

「手代木さんは軽いんじゃないよ。考え方が柔軟なんだよ。重いことをあんまり重くと思わないと言うか……」

「雪人さん、あんまりフォローになってない気がします」

「えっ。ご、ごめんなさいっ」

「いや、可愛いんで大丈夫です」

「有り難うございます？」

手代木と雪人が視線を絡めていると、「おい、なに二人の世界に入ってるんだよ！」

砂雪の怒りがますます増した。

「率直に言う。兄さんは人間と付き合わない方がいい。人間なんていい加減なんだ。あの男みたいに、きっと心変わりして兄さんは捨てられるよ」

表情に変化のなかった雪人が初めて顔を強張らせた。

砂雪は忘れてないよねと、彼に語りかける。

「口ではいくらでも好きだ、愛してるって言うけど、それだけだ。人間は簡単に嘘をつく。真実なんてない。それは兄さんが一番わかっているはずだよ」

手代木は、雪人が何を考え、思い出しているのか、深いところまではわからない。しかし彼の妹から聞いた、彼らの母親の話からして、いいことではないことはわかる。

そっと肩に触れると、びくっと怯えたように震えられて、それが人間への不信を再び呼び起こしているのだと思うと辛くなった。

「君、お兄さんに悲しい思いをさせるためにきたの」

「は？俺は兄さんに求婚しにきたんだよ」

「雪人さんは断ったよね。それで終わりなんじゃないのか」

「付き合っている相手が人間なら話は別だ。よりによって人間なんて、冗談じゃない。認めないよ、俺は」

「認めないなら俺を攻撃すればいいだろ」

手代木は声に不穏なものが混じり、低くなるのを感じた。体軀がいいので背筋を伸ばして座り、相手を見据えると威圧感がある。

彼は、憤りを覚えていた。

「雪人さんが人間にいい思い出がないのは多少知ってる。それでも俺を選んでくれた。君とは婚姻を結べないとも言っている。なのにわざわざ辛いことを思い出させてまで、別れさせる理由が何処にあるんだ。君は雪人さんを男として好きなら、好きな人を悲しませてまで自分を見てもらおうなんて、そんな酷い真似をしていいと思っているのか」

「.....」

「君のやり方は子供過ぎる。そんな君に、雪人さんは任せられない。仮に俺から離れようとしても、相手が君なら俺は雪人さんを絶対に離さない。俺は人間だから雪人さんを傷つけるかも知れないけど、それ以上に幸せにするって決意しているし、今雪人さんに辛いことを思い出させている君よりマシだ」

気持ち、睨み付けながら手代木が言うと、砂雪は悔しそうに唇を噛む。

雪人は手代木を見ながら薄く微笑んだ。

「砂雪。好きだって思ってくれるのは嬉しいけど、婚姻は結べない。さっき言ったよね。それに、手代木さんとは別れない。付き合う時、彼は僕に言ったんだ」

心変わりしたら、殺してくれてもかまわない。

そう言われ、抱き締められた時の腕の温もりを思い出したのか、雪人は自分の腕をさすった。

「兄さんは騙されてるんだよ」

忌々しげに言う砂雪に、「それでもいいよ。今、僕は幸せだもん」

雪人は本当に幸せそうに笑った。

「.....諦めないから」

砂雪は手代木を睨み、足早に出て行った。

ほっと息をついた手代木に対し、「未だ三十分も経ってないから、半額にならないかな……」
先ほどとは打って変わって、雪人が真っ青な顔をしているのでつい笑ってしまった。

「……本当に小さい頃は可愛かったんですね」

その夜、砂雪の小さい頃の映像を見せてもらった手代木は成長の妙技に感心していた。スクリーンに映る砂雪は、雪人そっくりの愛らしい少年で、昼間の青年とは印象が地球半周分くらい違う。

「今日はもう、青天の霹靂でしたよ。別人みたいになっているわ、求婚されるわ……。まあ僕たちの世界では兄妹で結婚することはあるんですけど、まさかと思って……。諦めてくれたかな……」

疲れたとへたっている雪人を労うように肩を揉んでやる。

「一度で駄目だったら何度でも説得しましょう。……それにしても嬉しかったです。雪人さんが幸せだって言ってくれて」

「当たり前のことを言っただけですよ？」

きょとんとしている恋人を、手代木は押し倒した。

小ヶ谷リイカ（オガヤリイカ）こと、リイカ・イル・エタンソレイエは恋人の屋敷徹（ヤシキトオル）と共に日本から遙か遠く離れた小国、ラペール王国に住居を移していた。

日本で屋敷と出会い、滞在して百年。二人は肉体年齢が進まないことを不自然に思われぬように転々としていたが、屋敷が最先端医術を学びたいとこの王国を選び、先月末に移住を決意して実行に移した。

しかし、「今からでも遅くないから、やめるか」

先日の電話で、屋敷は日本に残してきたリイカの養い子だった九曜（クヨウ）からある事実を聞かされて、移住ではなく滞在に切り替えることを勧めていた。

「昔の、遠い過去のことだ。気にすることではない」

九曜も余計なことを吹き込んだものだと、リイカは端正な顔をしかめた。

ここ、ラペール王国にリイカは以前もきたことがあった。

その記憶はリイカにとっては悲劇と言っても差し支えのないもので、養父のことを第一に考え、今回の移住に同伴出来なかった九曜にとって、リイカの唯一の支えであり恋人の屋敷の耳に入れることは当然のことだった。

「彼女は、もうここにはいないんだ」

リイカには、屋敷と出会う以前に愛していた女性がいた。

魔物であるリイカを受け入れ、彼の想いと同じように彼を想い、慕い、寄り添っていた女性。

しかし、彼女は亡くなった。リイカがその血液を全て吸い、殺してしまったのだ。

リイカは血を力の源とする吸血鬼と血を最も嫌う嫌血鬼（ケンケツキ）の間に生まれた魔物で、生きるために必要な血液は普段は少量で済んでいた。

しかし、嫌血鬼の体質を裏切ってまで、血液を求めなければ身体が維持出来ない事態が起きた。

戦争だった。

当時、一国の騎士として従軍していたリイカは前の戦いでの味方の壊滅状態に伴い、ほぼ独りで敵を迎え撃たなければいけないという窮地に立たされた。

本性が魔物であるリイカにとって、人間など赤子の手を捻るように倒すことが出来る。しかし数をこなせば無尽蔵ではない体力が次第に飢えを訴えた。

飢えで苦しんでいたところに、リイカを心配した恋人がやってきてしまった。

吸血鬼の本能が暴走して、リイカは彼女の首筋に食らいついた。

そして、気がつく腕の中で恋人は息を引き取っていた。

リイカは国を守るために戦っていたのではなく、彼女を守るために戦っていた。その自分が、彼女を殺した。

この事実はリイカを完膚無きまでに打ちのめし、彼は失意のまま国を去った。

屋敷はその話を本人から聞いていたが、まさか当国でのことだったとは思わず、そしてリイカが何の抵抗もなくこの国にきたことに驚きを隠せなかった。

屋敷はレイカが日本で、瀕死になってまで血液を受け入れなかった原因である恋人との悲劇を、何百年経とうが引きずっていると思っていたからだ。

「……お前の探求心は、長く生きる上でいい刺激を与え続けるだろう。私はそれを支持する。それだけだ」

屋敷はレイカと血液提供の契約を結んだ関係で、不老不死に近い身体になった。彼が医師として高みを目指すことは、彼の人間としての死を奪ってしまったレイカにとって救いにもなっている。高みは、到達出来るかわからないもので、長い時間が潰れる。屋敷が時間を暇に過ごしてしまうこと、長い時間を得て後悔することがレイカには怖かった。

「今夜は少し寒くなりそうだな」

街中、屋敷はそう言って隣を歩くレイカのフードを整えた。

この国は年中温暖な気候だが、急な冷え込みが時々ある。雪こそ降らないが急激な気候の変化に身体が追いつかず、病が流行することもあった。それ故か、古くから医術が盛んで小国ながら先進国にも負けない医療技術が培われていた。

「大学は来月からだったな」

「ああ。公用語がドイツ語で助かった。少し間違えば意味不明な言語の国になるから、語学学校に通わないといけないからな」

自分の道を突き進む男は総じて魅力的である。

レイカも表向きは屋敷をえさ呼ばわりしているが、心の中では魅力的な恋人を自慢に思っている。知らず、笑顔になる。

「お？可愛い顔しちゃって」

「な、なんだっ」

「お前、凄い綺麗な顔してるんだから、もっと愛想を振りまけよ。可愛がってやるのに」

「私を猫の仔みたいな言い方するな」

むっとして言い返すと、屋敷は「可愛がるって、そういう意味じゃねえよ……？」

大人同士がする可愛がりだと仄めかし、レイカは柄にもなく赤くなった。彼は不意打ちに弱いのだ。

そんな恋人の手をとり、屋敷は雑踏を歩いた。

暫く他愛ない話をしながら進んでいたが、「レイカ……？」

突然立ち止まったレイカは真っ直ぐ前を見据えて固まっている。

「なぜ、きみが……」

消え入りそうな声で呟くと、レイカは崩れ落ちるように気を失った。

いつもの貧血だろうかと屋敷は濃縮血液のタブレットを取り出したが、「レイカ様。私ったら、驚かせてしまったようだよ」

ピアノのような美しい声がして、屋敷は目をあげた。

雑踏の中、二人を見詰めていたのは美しい青年だった。

金糸の髪に、宝石のような碧い瞳。優しげな表情。

屋敷はその顔に、見覚えがあったがまさかと思いつつ、名前を口にする。

「……ユークレスク……」

それはこの地で亡くなったレイカの恋人の名前で、しかし相手の身体は男性で、しかも生きている。だが、他人の空似にしてはレイカが持っていた彼女の姿絵と似すぎていた。

「あら、私を知っているのね」

言葉遣いは女性だが、声が男性だった。

「お前、何者だ……？」

訝しんだ屋敷の問いかけに彼女、いや彼は優しく笑った。

「私の名前は、ユークレスク。昔の名前も、ユークレスクよ」

「昔の名前……？」

「レイカ様はきっとわかったはず。私、生まれ変わったの」

そう言われて、屋敷は咄嗟に反応が出来なかった。

目の前の青年はどういう意図で生まれ変わりなどと、到底信じられないようなことを言うのか。

レイカを抱え直し、笑みを浮かべている青年を真っ直ぐ見据える。普通にしていっても怖いと言われる屋敷の視線を受け止めても、青年は怯むことはなかった。

「あなた、レイカ様のなに？レイカ様は私の夫になる方よ？返してちょうだい」

「ふざけるな。お前みたいな素性のわからない、生まれ変わりだとか言うおかしな野郎に恋人を渡せるか」

わざと恋人、と強調させると青年は大袈裟に驚いてみせた。

「あなたのような怖い顔をした人間が恋人？……嗚呼、レイカ様は私があのような形でいなくなってしまったから気がおかしくなってしまったのかしら……」

嘆いている青年は大股で距離を詰め、屋敷が避ける間もなくレイカの頬に触れた。屋敷が身を捻ったので触れたのは一瞬だったが青年は触れた自分の指先を大事そうに包んでうっとりしている。

「……レイカ様。本当に生きていらっしゃった。あの時、私の血はちゃんと役に立ったのね。死に神に魂を狩られ、黄泉にいる時でさえ、そればかりが気になっていたの」

「……………」

「輪廻を終え、生まれ変わるのが人間だと知った時は歓喜したわ。レイカ様さえ生きていれば、また出会えると、そう信じていたの。まさかこの国で会えるとは思っていなかったけれど」

今にも嬉し泣きでもしそうな青年は、どうやら嘘を言っているようには見えなかった。

彼は、本物のユークレスクで、レイカの恋人だった女性の生まれ変わりらしい。信じられないが、レイカの様子からして信じるしかなさそうだった。

「……お前の目的は何だ」

「レイカ様よ。あの戦争から帰ってきたら、正式に結婚して、血液提供の契約を結んでくださると約束していただいたの。私はレイカ様と結ばれるために生きてきたのよ」

「悪いがそれは無理だ」

屋敷は溜息をついてレイカを背負った。ユークレスクは不思議そうな顔をする。

「リイカは俺の恋人だから結婚させられないし、俺と血液提供の契約をしているからだ。今のリイカに契約者は二人も要らない」

「・・・・・・・・」

「これ以上、何か話すことがあるなら一端アパートメントに戻りたい。意識が戻らないリイカを、こんな冷え込みそうな街中に長い時間いさせたくはない」

嘘よ、と呆然としているユークレスクに一応断って、屋敷は歩き出した。

目覚めたリイカに、ユークレスクが隣の部屋にいると告げても、彼は思いの外落ち着いていた。

「本当に、あいつは生まれ変わりなんだな？記憶も容姿もそのままってことがあるのか？」
「魂が彼女のものだというのは間違いない。記憶はわからないが、容姿についてだが、前世が人間だった彼女は再び人間に生まれついたから肉体の形も前世の記憶が色濃く残っているせいで、性別は違うものの同じになってしまったのだろう」

屋敷は、やはりこの国に来るべきではなかったと頭を抱えた。

「向こうはお前に会いたいって言ってる。……追い返すことも出来るぞ」

「いや、会おう。徹、一緒に来てくれないか」

言われて、屋敷は戸惑った。

元は恋人同士だった彼らが、同じ場所に立つ。

死を乗り越えてまでやってきた恋人を、リイカはどう思うだろうか。ユークレスクは未だに本気で彼を愛している。それを伝えられ、リイカはどうするのだろうか。

愛していた恋人とは悲劇的な別れをしてしまっただけに、重すぎるほどの罪悪感もあるだろう。

リイカが彼に心を向けるのを見るのが、屋敷には辛かった。

俺も未だガキだなと、嫉妬してしまう自分に内心苦笑する屋敷に、リイカは「……安心しろ。私が、今愛しているのはお前だ」

そう、ハッキリ言った。

屋敷は手を取り、キスをした。

万一のことを考え、支えながら部屋を出ると「リイカ様！」

椅子に座ることもしていなかったらしいユークレスクが駆け寄ってきた。

碧い目に涙を浮かべ、リイカの手に自分の手を重ねた。

「何百年ぶりでしょう。お会いしとう御座いました、リイカ様」

「ユース、……私は君に再び会えるとは思っていなかった。輪廻のサイクルを終えた君が、この時代の人間に生まれ変わるとわかっていたら、私はずっと待っていたと言うのに」

屋敷が壁際に離れると、リイカはユークレスクを優しく抱き締めた。感触を確かめるように背をさすり、身体を離した。

「華奢だが、今の君は男なのだな」

「……申し訳ありません。私もまさか男に生まれ変わるとは思っても見ませんでした。この身体なので、私はリイカ様をお探しすることをやめようと思いましたが、でも、この顔と心は昔のまま。リイカ様が美しいと褒めてくださった顔と、リイカ様を想い愛する心が私に勇気をくださいました。そして再び出会えた奇跡に、私は涙が出るくらい感激しております」

「そうだな。君は昔と変わらない。美しく、私だけを真っ直ぐ見ている。そしてこの国で出会えたことは魔王陛下の思し召しに違いない。……だが」

リイカはユークレスクの目を見て「私は、今の君には相応しい男ではない」

静かに、優しく告げた。

「君の命を奪ってしまった私は、君にどのような刑に処せられても文句は言えない。今ここで私に死ぬと命じれば私は喜んで死ぬだろう」

「リイカ様っ。私はあなた様の死など、望んではおりませんっ。あの時、私は喜んで命を差し出したのです。後悔も恨みもしておりませんわ」

「優しいユース。君は今でも本当に私を想ってくれているんだな。それでも、今の私は君に同じような強さの想いを与えることは出来ない」

何故ですか、とユークレスクは声を震わせた。

「心は、いつまでも君にあると思っていた。君を殺しておいて、罪深い私はこの身が減びるまで君を愛し抜こうと、本気でそう思っていた。だが、このような私を赦し、包み込み、愛情を注いでくれる存在に出会ってしまったんだ。君という最愛の恋人を失った心の隙間を埋めるほどの、大きな存在と異国の地で出会ったんだ。許してくれとは言わない、しかし心を変えることは出来ない」

普段饒舌ではないリイカが吐露することはあまりなく、ましてや屋敷への想いなど言葉にしたことは殆どなかった。

ユークレスクは涙をはらはら流している。

「私は彼と共に生きる決意をした。君とは結べなかった契約もした。君のことを忘れたことは片時もなかったが、今の私の心はもう君にはないんだ。……済まない」

「そんなっ。あんまりですわっ。私は、私は死して、何百年経とうとあなた様を恋い慕っておりましたのにつ。こんな、……納得がいきませんわっ」

「君が怒るのは無理がないことだ。不義理な男だと罵ってくれてもかまわない。だから君に私の命をあげよう」

好きにしてくれてかまわないとリイカが言うと、命なんて欲しくないと言ったユークレスクは子供のように泣きじゃくった。

「私は、昔のようにリイカ様の心からの笑顔が欲しゅう御座います。私を、愛しているとおっしゃったお心が欲しゅう御座います」

何故、どうして、他の人間があなたを占めてしまっているのかと、ユークレスクは泣きながらリイカの胸を力なく何度も叩いた。

リイカはユークレスクの好きなようにさせて、しかしその柔らかな金糸の髪にそっと触れた。彼ははっとしてリイカを見上げる。

「可愛いユース、愛しいユース。君の涙は何百年経っても痛い。だが、私は心を与えられない。この心は彼にある。君の望むものは、今の私には何一つ与えられない。不義理な私を思う存分責めてくれ。君の気は済まないかも知れない。私の心以外で私に出来ることならなんでもしよう」

そっとユークレスクを見詰めるリイカの眼差しに、甘いものはなかった。

国一番の美女と謳われた恋人、ユークレスク。魔物であるリイカに恐れを抱かず、一番愛おしいと輝くような笑みを浮かべていた。愛を囁き合い共に過ごした日々は愛おしいものだった。戦

争が二人を分かち、悲劇の死で永遠に引き裂いたかのように見えた。

時を隔てて再び巡り会えた奇跡に喜びこそすれ、今のレイカの心に昔のような恋情はない。
彼には、屋敷がいた。

初対面からぶつかってばかりだったが、次第に恋を自覚して行って、惹かれ合った。過去の悲劇から憂い、運命を共にすることを躊躇ったレイカを強引に自分のものにした、強い恋人。今、レイカの心は彼にしかない。

「ユース、済まない」

抱きついてきたユーレスクを、レイカは抱き返さなかった。それは愛おしい恋人だった男からの初めての拒絶で、ユーレスクを打ちのめした。

「.....あなた様のお気持ちは、変わらないのですね.....？」

珠のような涙をこぼしながらの問いに、レイカは頷いた。

「レイカ様。レイカ様は、今、幸せで御座いますか.....？」

「ああ、幸せだよ。.....とても、幸せだ」

想いを込めて伝えたレイカに、ユーレスクは微笑みを見せた。

「良かった。私は、レイカ様の幸せを、ずっと、ずっと祈っておりました。私がレイカ様を幸せにしてあげたかった。でも、レイカ様が幸せなら、私はそれで幸せですわ」

「ユース.....」

「最後に、お願いがありますの」

くちづけをして欲しいと、かつてせがんだように愛らしくユーレスクはレイカに囁いた。

レイカは躊躇ったが、「.....かまわない」

背後で屋敷が小さく言ったので、ユーレスクを抱き寄せた。

「.....」

キスは、恋人たちの失われた時間を取り戻すかのように優しいものだった。長くもあり、短くもあったそれを見詰めていた屋敷は、遠い日の凜々しい騎士だったレイカと可憐な乙女だったユーレスクを見た気がした。

唇が離れると、ユーレスクはもう涙をこぼしていなかった。

「レイカ様。ずっとお慕いしておりました。再びお会い出来て、本当に良かった。生まれ変わった甲斐がありました」

ですが、私は身を引きますと、ユーレスクは少し声を震わせて言った。

「私の幸せはあなた様の幸せ。もうレイカ様を困らせません。.....陰ながら、レイカ様をこれからも想っていますわ」

そう、優しく笑ったユーレスクに、レイカは笑みを返した。

「.....帰って良かったのか」

屋敷の呟きに、レイカは片眉をあげた。

「本当はついて行きたかったんじゃないのか」

「.....ついて行ったら、お前はどうしたんだ」

「お前がいなくなったら、首切って死ぬかな」

冗談めかして言うと、レイカは「お前のような馬鹿を残して、彼と行くものか。それに、私の食料はお前だけだからな。今更あんな飢えを体験するのは嫌だ」

思い出したのか不機嫌そうに言った。

「冗談でもいいから俺が好きだから残ったとか言えないのかよ」

「なにを怒ってる。……まさかお前、私が彼と話した内容を聞いていなかったのか……？」

殆ど聞いていなかった凶星を指され、屋敷はばつが悪くなる。

「呆れた。お前はやっぱりただの食料だ。えさだ」

どれだけ心がお前にあるか、一生分言ったのにと、レイカは溜息をついた。

「鷺沼、付き合ってくれ！」

「断る」

告白をただの一言で切り捨てた鷺沼智（サギヌマサトル）は、落胆する相手をまともに見ず、その場を去った。

最近、智は正直困っていた。

もう七人に告白されている。それも全員男。

そこら辺の女の子より可愛い顔をしている智は、それでも今までそういう対象にされたことはなかった。しかし、それがどうしたのか、突如として告白されることが多くなってしまった。

生まれて初めての告白こそ女の子だったので未だ救いはあるが、高校生にもなって男から告白される生活を送る羽目になるとは思わず、目下それが悩みの種である。

「……僕の何がいけないんだ……」

「お前は何も悪くない。だが、これはお前のせいでもあるかも知れない」

哲学的なことを言う、隣にいた太刀岡祥吾（タチオカショウゴ）は「なんかな、艶が出てきたんだよ」

そんなことを言って智を更に苦悩させた。

「前はお前にそんなものを感じる人間はいなかった。だが、幼馴染みの俺ですら、時々ドキリとするくらいの濡れた婀娜っぽい艶を感じることもある。押し倒したくなるような、ムラムラした欲情を覚える時がある」

「一緒に風呂に入ったこともあるお前にそんなこと言われて、僕は今不幸のどん底にいる」

「安心しろ、俺には最愛の恋人がいる。たとえお前に欲情したとしてもそれをぶつけることは永遠にない」

「万が一ぶついたら僕は砕けて消えてなくなるだろう……」

智は溜息をついた。

何事にも動じない、そして何事も許容する彼の凄まじい精神力でも、現在の事態は少々イタさを感じてしまうほどだった。

同性から告白されて嬉しいと思うのは、同性愛者か自分より心の広い人間だろう。智はそう考える。

自らも同性を恋人に持つ身なので、同性との付き合いについてとやかく言えるものではなく、嫌悪などの負の感情は少ない。しかし、連続するのはいかながなものかと思う。

ましてや智の学校は共学。

ただでさえ容姿のせいで女子から妬まれることがあると言うのに、彼女たちの憧れの的から告白された時には殺気が存分に含まれた視線が刺さるようで居心地が悪い。

「なあ、艶が出た原因に心当たりは？」

祥吾に言われ、智が何となく考えたのは恋人との関係だった。

恋人、神坂築（カミサカキズク）と関係を持って早半年。想いを告げた流れで肌を重ね、それ

から暫くは食べられてしまうのではないかという勢いで身体を貪られた。

神坂は男同士のあれこれをBLのCDや小説、漫画で周囲を引かせるほど熱心に勉強して実地に臨んだせいか、意外なほどに巧かった。智もそれに溺れてしまい、淫らに身体を這う彼の指を退けられなかったという反省点もある。

しかしそのせいで、自分から艶が出たと言うことは智は願きたくなかった。願けばこの先、神坂ともっと肌を重ねれば自分の男を引き寄せてしまう艶というのは増すということを肯定しているようなものだった。

「もうヤツたからとか？」

当たらずも遠からずなことを言われ、智は片頬で笑った。

「マジですか、鷺沼さん。可愛い顔して案外やり手だな」

「そんなこと思ってないだろ。中学で初体験してるくせに」

眉目秀麗な祥吾は今の彼女ではないが、中学の時に「喰われた」と自己申告している。

「そうか、智も大人になったか」

正確には抱かれる方だが、この場合もそういうのだろうかと思はれ、智はぼんやり空を見ながらくだらないことを考えた。

「どんな子？付き合ってるのか？行きずり？」

「.....付き合ってるよ。半年くらい経ってる」

「同じ歳？年上？年下？この学校の子？可愛い？美人？」

「お前は案外五月蠅いんだな.....」

智が鬱陶しげに見詰めると「だって親友のお前の初春が気になるんだもん」

「面白がってるだけだろ」

そう言った祥吾に突っ込みを入れる。

神坂は智よりゆうに千歳は年上で、女性らしい容姿ではなく男らしい美形だった。勿論同じ学校の訳がない。

事実を言うわけにもいかず、智は黙った。

「.....あんまり幸せじゃないのか？」

沈黙を悪い方向にとった祥吾が声を落とす。

「そうじゃない。.....あんまり、人に言いたくないだけだ」

「秘密の恋ってやつ？」

「うん、まあ.....そんなところ」

小さく呟いた智は妙に大人びて見えて、祥吾は目を眇めた。

「本当、お前も大人になったんだな」

溜息をつかれ、智は何のことだと小首を傾げた。

仕事をしている姿に禁欲的な色気を感じる。

これが燃え、いや萌えというものかと、神坂は智が熱心に電卓を叩く様子を観察しながら頷いた。

「シャチョ、お客様です」

受付の蘭林香（ランバヤシカオリ）に促され、客と対峙しても彼の意識は恋人に向かっていた。

最近伸びてきて嫌になると言いつつ、学校にバイトにと忙しく切る暇がないとぼやいていた智の黒髪は男としては少し長い。それが、未だあどけなさや幼さが多分に含まれた可愛らしい顔によく似合う。

適度に筋肉はあるが華奢な印象が否めない身体はしなやかで、神坂はうっかり智との夜について回想していた。

今は禁欲的で堅いイメージしかないが、智は本人の心に反して身体の方は案外と快樂に弱い。一度、快感の火を点してしまえば際限なくその色気を振りまく。天性の男殺しと言ってもいいくらいの夜の顔を知っているのは自分だけでいい、そして自分が彼の相手で良かったと思う。

智は神坂がやりすぎだと怒る時もあるのだが、神坂にしてみれば未だ我慢している方で、むしろ自分を褒めてやりたいと思っているくらいなのだ。

許されるなら智が泣いて許しを請うまで身体を繋げて味わいたい。智の意思を無視していいなら、いっそ監禁して死ぬまで抱き続けてもきっと飽きることはないだろう。

これは智の性格と自分との付き合いの関係上あり得ないことだが、何処かに縛り付けて無理矢理淫らな言うことを利かせるというシチュエーションも萌える。

イメクラもいいかも知れない。智を患者にして、媚薬などを打ってどろどろにして抱き潰すというのは、きっと廃人になるくらい凄い体験になる。

など、そんなBLのイタさや非常識すぎるファンタジーさを現実には引っぱり出した犯罪真っ直中の超危険思考を持つくらい、神坂は本当に智の身体を溺愛していた。

勿論、根が真っ直ぐで、真面目、驚異的なまでに許容能力があり、そして柔軟すぎるその心を溺愛しているのは言うまでもない。

心身共にここまで愛されていることを、恐らく智は夢にも思っていないだろう。

神坂は親友にショタコンと罵られようが、千歳以上年下の恋人を心の底から愛していた。

「おい、聞いているのか」

「いだっ」

側頭部を硬いペンケースで強かに叩かれ、神坂は目眩く筆舌禁止になりそうな回想と妄想から脱出した。

「な、なに。智……」

「学校に忘れ物をしたからとりに行ってきたいんです。この休み時間内に戻ってこれないと思うので、一応社長であるあなたの了解をとりたいと思ひまして」

「あ、ああ。そんなこと？いいよ、行っておいで」

気をつけてね、と送り出し、ふと神坂の好奇心は「智の学校生活」に傾いた。

今まで智から学校について語られたことはあまりない。神坂もあまり気にしなかった。

しかし、来客を終えて暇になった神坂は気になって仕方がなくなった。

恋人の学校に行く。それっていいかも知れない。

「社長、何処に行くんですか？」

「尾行」

社員たちが、この変態めという目つきで自分を見ているが、神坂は全く気にしなかった。

「何をしても社長の自由ですけど、優秀なアルバイトが突然辞めるようなことは控えてくださいよ」

「見つかったら素直に殴られて謝ってくださいね」

「智くんも厄介な方に惚れられたもんだなあ」

「社長なんて顔がいいだけの変態なのにね」

休憩に入った社員たちは口々に勝手なことを言う。

「じゃあ、行ってくるね」

準備を完了した神坂は、死に神が使う鎌の長い柄に座り、姿を消した。

智の通う学校は会社からは離れたところにある。

神坂は彼を追い越さないように超低速で尾行し、気付かれないように学校に侵入した。

死に神の魔力で今の神坂の姿を視認することが出来るのは、彼と関係がある智だけだったので本人に見つからなければ空を飛んでいても支障がない。

「鷺沼、私服じゃん。忘れ物か？」

「ああ。このテキストないと困るから」

「勉強熱心だなあ。その教科のテストって一週間後だろ？」

「備えあれば憂いなしだからな」

クラスメイトと話をして教科書を鞆にしまい、智は会社に戻るために廊下に出た。

「智。未だ校内にいたのか。さっき、お前のこと二年の先輩が探してた」

「何の用事か訊いたか？」

「知らんが、どうせ八人目だろ」

智の可愛らしい顔が曇る。

神坂は八人目とは、と首を傾げた。

「僕は今の話を聞かなかった。そういうことには出来ないか」

「無理だろ。私服のお前は可愛さ倍増で目立つから、校内にいることは筒抜けだ」

やはりクラスメイトでも智のことを可愛いと思っているやつはいるのかと、神坂は頷いた。

「仕方ない。二年のフロアに行ってくる」

溜息をついた智のあとをそろそろとついて行く。

「鷺沼、こっちこっち」

一人に手招きされた智は頭を下げて教室に入った。中には緊張した様子の上級生と見られる青年がいる。

「あのさ。鷺沼、俺と付き合っただけだ」

神坂は耳を疑った。

日本人は同性愛について未だ未だ閉鎖的だと思っていて、共学である智の学校ではこういうことがあるとは考えていなかった。しかも、対象が自分の恋人なんて、青天の霹靂過ぎる。

「済みません。お断りします」

智はさっさと切り捨てて去っていったが、この事実衝撃を受けた神坂は暫く呆然としていた。

「な？鷺沼は駄目だったろ？最近凄い色っぽくなったけど、あいつは男だし、成功するはずなかったんだよ」

振られた青年の友人が気を落とすなと肩を叩く。

「ん～、俺としては五分五分だと思ったんだよな。鷺沼、艶が出てきたのはきっと男となんかあったと思うんだよ」

青年の周りにいたひとりが言う。

「え、男と？」

「ああ。あんな感じの色っぽさってクラブで見たことあるけど、そいつ同性愛者でさ。男に抱かれてこういう色気が出たんだって自慢してるの聞いたし」

「まじで？じゃあ鷺沼って本物なのかな。最近あんな感じだから、最近やられたってことか……？」

そこまで知らねえよと、取り巻きが言ったのを聞いたか聞かないかで、神坂は死に神の鎌をその場で大きく振っていた。

教室にいた全員が一気にその場に倒れ込む。

床に柄を打ち付け、口の中で呟くと紫色の発光が教室を包んだ。しかしそれは一瞬の出来事で、教室の中の失神者は勿論のこと廊下にいた人間も把握出来ていない。

「……あれ？俺、どうしたんだっけ」

ひとりが目を覚まし、次々に目覚めているが、彼らはずい先ほどまでしていた会話の内容を覚えていない。

智に告白したことすら、曖昧になっている。

「これは少々いただけないなあ……」

恋人に降りかかっている見過ごすことの出来ない災難に、神坂は対策を練る必要があった。

海外から新しい教師がやってくると言う。これはさほど、特殊ではない。それが自分のクラスの副担任であろうと、智にはどうでもいいことだった。

静かな環境で最良の勉強が出来ればいい。

最近男から熱い視線を受けて静か、とは言えないが一時の気紛れだと自分に言い聞かせて時間が経つのを待っている状態だ。

しかし、「初めまして、皆さん。アルマンディンと言います。アディって呼んでくださいね」

そう言ってにっこり笑って現れた「女性」を見た時、智は平和な学校生活が崩れる音を聞いた気がした。

「よろしくをお願いします」

背中の中程まである紅茶色の髪、涼しげで切れ長の瞳も紅茶色。整いすぎているまでに整っている美貌。

全てが「彼」と共通していた。

「……なんであんたが、ここに」

思わず呟く智に、女性の見た目をしているが中身は当然のことながら男である神坂はにっこり笑った。

「智、隠してることがあるでしょ」

咄嗟に言い返せず黙ると「恋人を守るのも大切な仕事だからね」

神坂は胸を張っている。

昼休みの時間、アルマンディンという英語教師になっている神坂は教室にやってきて智の机の前に立った。

「智、お昼食べましょ」

「……あんと食べるくらいならぼっちめしでいいです」

「どうしてそういうこと言うかな」

小首を傾げる神坂は文句なしの美女に見える。

いったいどういった仕掛けで、身体の線まで女性になっているのか。魔物と言っても神坂に化ける能力があるとは聞いていない。

智がまじまじと見詰めていると、「アディ先生って智の知り合いなのか？」

パンを嚙りながら祥吾がやってきた。

「全然知らない人」

即答する智に、「恋人に対してそれは酷くないかしら」

神坂が平気で言うので教室が静まりかえった。

クラスメイトの視線が一気に智に向く。

「おい、あんな……」

「うわあああ、マジかよ！鷺沼の彼女っ？こんなに美人でしかも先生とか、ありかよ！」

「鷺沼くん、可愛い顔してるのにお姉様と付き合ってるんだあ」

男子も女子も騒ぎ出して智はうんざりした。

オマケに「先生、本当ですか？」

インタビューのように訊かれて神坂は調子よく頷く始末。

「私、智が心配で同じ学校に赴任することにしたのよ。彼、最近モテるらしいから、心配になっちゃって」

暗に最近男から告白されているだろうと言われて、智は溜息をついた。

「そこ知ってるなら断ってることも知ってるでしょうが」

「あら、智。それでも心配になっちゃうのが乙女心よ？大事なあなたが知らない間に毒牙にかかったら私……」

全校生徒殺しちゃうかもと、耳元で囁かれた智は本気を感じ取って乾いた笑いを浮かべる。

「いつまでいるんですか？」

すっかり諦めた智が問いかけると、美しく化粧を施した顔で「そうね。私たちのラブラブぶりが全校に知れ渡るまで、かしら」

あっという間でしようねと自信を覗かされて、「好きにしなよ」

智はぐったりと机に突っ伏した。

恋人の暴走ぶりを智は咎める気にもならず、自分も黙っていたことがあるので悪かったなと思ひ、そのままにしておいた。

すると調子に乗った神坂はいたるところでいちゃつきだし、智は仮にも生徒と先生だから問題になるだろうと思ったが誰にも咎められなかった。これは何か仕掛けをしてあるな、と智は思ったが黙っていた。

神坂がやってきて男に告白されることはなく、祥吾が言っていた「艶」というのも「ド迫力美女と夜ごといけないことをしているせいだ」ということに落ち着いているらしいことに、応急処

置的には正しいのではないかと思うことにしていた。

そうこうしている間に二ヶ月が過ぎ、神坂は本業が忙しくなってきたと智に学校に来ることをやめることを宣言した。

「やっとか。やっといなくなってくれるんですね」

「なにその嬉しそうな声は」

「迷惑をかけている自覚はないんですか」

「これに懲りたら不用意に愛想を振りまいて告白されないこと」

不機嫌そうな神坂に、「誰のせいだと思ってるんですか」

智は呆れて胸の前で組まれている彼の手を叩いた。膝の上に座らされているというかなり恥ずかしい格好だが、誰もいないので甘んじて許している。

「俺のせいだって言うの？俺は智を愛してるだけなのに」

「.....その愛情、多少暑苦しいですよ」

「逃げようとしても逃がさないよ？智は俺の恋人だ」

「はいはい」

ぎゅっと抱いてくる恋人の頭を後ろ手に撫でながら「こうやって甘やかすから、図に乗るんだよな」

智はスパルタ教育を試みることを決意した。

その後、「智くんって、思っていた以上にかかあ天下だよな」社員の間で恐れられるほど、智が神坂の操縦が巧くなった。

クリスマスまでの受難：前編

この時期になるとクリスマスに誰かと過ごしたいと思う人間が密かな動きを見せる。

恋人たちの聖夜まで、あと二ヶ月。恋人がいない人間はこの時期から付き合いを始め、クリスマスには熱い夜を、と考えるものは少なくない。

手代木篤志（テシロギアツシ）は、自分には関係のないことだと思っていた。

例年、恋人がいなくても仲間と過ごしたりして騒がしいし、恋人がいる時は恋人と過ごしている。

容姿、性格共に人生の勝ち組に位置している彼は自覚はないがかなり、恵まれていた。

そんな彼の今年のクリスマスの予定は、当然夏の暑い日に会った恋人と過ごすという選択肢以外ない。

恋人、雪嶋雪人（ユキシマユキト）もそれをわかっているらしく、というより「ここ数年なんですけど、……まあ、お察しの通り智くんがきてからクリスマス前後は毎年休みなんです」

と、彼の雇用主である神坂築（カミサカキズク）が恋人である鷺沼智（サギヌマサトル）を溺愛しているのが、目に見えてわかるような横暴さを発揮しているらしい。

「なら問題ありませんね」

確認をとった手代木も、クリスマス前後は休みを申請しようと思っていた。

恋人と過ごすクリスマスは初めてではないが、雪人は今までの恋人とは違う。運命というものを信じるわけではないが、そんなことを感じてしまうような、今までで一番大切な恋人だった。

クリスマスの確約を取り付け、あとは二ヶ月間を順調に過ごすだけだと仕事に精を出していた手代木の生活に不穏な陰が差したのは、本社から臨時の社員がやってきた時だった。

「よろしくお願ひします」

ぺこりと頭を下げられ、手代木も倣う。

実は夏が過ぎた辺りから手代木の担当している地域で電圧故障が頻繁に起こり、ちゃんとした電圧で動かされなかった電化製品が各企業から大量の修理品として持ち込まれていた。

一部の企業を除き、大型電化製品は頻繁に買い換えるような余分な資金はない。修理出来るものは何度でも修理して使う。

ただ一件だけは、毎回ほぼ買い換えが必要なので、そこは仕方がないにしても、手代木は残業するくらい忙しい日々を送っていたので臨時で手伝いがきてくれて助かっていた。

「手代木さん、今日も残業ですか？」

手代木の補佐をしている本社からの手伝い、凍原真結美（トウゲンマユミ）は人懐こい笑みを浮かべて手代木に問いかけてきた。

この手の笑顔は厄介だな、と手代木は内心舌打ちする。

他人の機微というよりモテる男のサガか、女性の機微に長けている彼は彼女が「職場の同僚以上の好意」を抱いていることを見抜いていた。

普通なら自惚れとしてあしらわれるかも知れないが、手代木の分析は冴えている。

「今日は残業はしません。一緒に帰る約束をした人がいるので」

「そうですか。一緒にお食事でもって思ったんですけど。もしかして、一緒に帰るのって彼女さんですか？」

探るような目で見られたので「恋人です」

手代木は女性じゃないけどと心の中で呟きながら答えた。

「そうなんですか！手代木さん、格好良いですものね。彼女さん、いますよね」

大袈裟なくらい驚かれて、手代木は少し不思議に思った。最初に彼女を作って十数年、意外に思われたことは一度もない。

曖昧に頷いていた手代木は「私、彼女じゃなくて彼氏さんかと思いました」

ハッキリとそう言われて作業台の上に機材を落とした。

「か、彼氏……、ってどうしてそう思うんですか……？」

内心の動揺を抑えるようにゆっくり問いかけると、「実は私、ここにお手伝いに来る前に下見していたら手代木さんのこと見たことがあって。その時、凄い綺麗な男の人と歩いているのを見たんですよ。北欧系の、銀髪みたいな髪の男の人です」

間違いのない、雪人のことだと手代木は確信した。彼の恋人は容姿と使われている色彩からとにかく目立つ。

「二人とも幸せそうに歩いていたから、手代木さんってそっち系の人なのかしら？って思っていたんですけど、彼女さんだったら違いますよね」

確認をとるように言われて、手代木は一瞬迷った。

雪人の存在をカミングアウトしようか、それとも上手いことはぐらかそうか。

前者は男同士ということもあり、手代木は割り切っているとはいえ、何処かで抵抗があった。しかし出来ないこともない。

後者にすべきだろうか。そもそも、未だ知り合ってそんなに経っていない人間に、自分の恋愛事情を開けっぴろげに話すのはどうかと思う。真結美が悪意のある人間ならば、傷つくのは自分ではなく雪人だ。

一瞬にして結論に至った手代木は「違うんじゃないですか？」

逆に問いかけるようにしてはぐらかした。

この時の自分の判断を、手代木は後悔することになる。

「女に目をつけられる男の魅力とは……」

受付の蘭林香（ランバヤシカオリ）が暇つぶしに呼んでいる女性誌の見出しを口にした雪人は「お雪ちゃん、何見てるんだい」

同僚の御厨剣（ミクリヤツルギ）に言われて雑誌を見せた。

「あー、これな。俺のかみさんも昨日買って見てたわ。魅力っていやあ仕事をしてる姿らしいぜ。真剣な眼差しが素敵、ってやつじゃねえの？」

「それは萌えるよね」

神坂が自信を持って言ってくる「燃える」というのはよくわからないが、御厨の言うことはわかる気がする。

手代木が仕事をしている姿はとても魅力的だと思うからだ。

「お雪、今日は残業」

「えっ？な、なんでですかっ？」

今思い出したばかりの恋人と、久方ぶりに一緒に帰る予定だった雪人は思わず声をあげた。

「本業の債務者がお前の国まで逃げているらしい。入国許可が緩いせいだ。お前、王様なんだから責任とって債務者を捕獲しろ。これ、リストな」

「そ、そんな……。僕、本業の方は苦手なんですよ……？」

知ってるじゃないですかと泣きを入れても「自分の国に犯罪者がいてもいいのか？王様として見過ごすのか？」

債務者は犯罪者ではないと言いたかったが、神坂の有無を言わさぬ圧力で雪人は口を噤んだ。

「雪嶋さん、今日は何か用事があるんでしょう？明日にしてもらった方がいいんじゃないですか？」

唯一神坂に負けない智が心配そうに問いかけ、雪人は頷きかけたが、「……雪嶋」

恋人に優しくされている雪人が気に食わない神坂から、ドスの利いた声で呼ばれて怯えた仔猫のように首を縮こまらせた。

「社長、最近人使いが荒くありませんか。本業に口を出す気はないですけど、脅すのはやめてください」

「智！俺はいつでもみんなのためを思って行動してるよっ？社員あつての会社じゃないか！」

そんなこと、微塵も思っていない。

神坂以外の全員が同じことを思ったが、あまりに呆れてしまったために口には出さなかった。

「僕、電話してきます……」

雪人はとぼとぼと会社を出て、苦手な近代兵器の筆頭スマートフォンを操作した。

手代木の名前と、彼の写真が直ぐに出てくる。照れ臭そうに映っている写真を見て、思わず笑顔になった。

「あ、手代木さん、お仕事中に済みません」

『どうかしたんですか？』

「メッセージにしようと思ったんですけど、見てないとまずいので。あの、……今日は一緒に帰れなくなりました」

『え、どうしたんですか？珍しく残業ですか？』

「そうなんです。社長命令で、国に帰って本業の方を」

金融会社スチャラカばらだいの本業、積み立てられたお金に応じて命や身体のパーツを立て替えること。毎回積み立てられるお金がなくなったり、トラブルがあった場合は即没収。

適応能力の凄まじい智曰く、「保険会社の凄い版」とのこと。

『雪人さん、本業の方は得意じゃないって言ってましたよね、……大丈夫ですか……？』

手代木の声が沈んだので雪人も気持ち沈んだ声になる。

「僕の国に債務者が行ってるみたいで、何とかしないと治安が悪くなるので頑張りたい……です」

」

自分でも大丈夫だろうかと不安ばかりが募るが、あまり怯えていては電話越しの手代木が心配しすぎてしまうと雪人は少しだけ明るい声を出した。

『そうですか。じゃあ残念ですけど、家で待ってます。仕事、気をつけてくださいよ。怪我とかしないでくださいよ』

念を押す声が優しく、雪人は泣きそうになった。

「有り難う御座います。出来るだけ早く帰りますから」

少し雑談をして通話を切った雪人は「頑張らないといけないな」

王様なんだしみんなのためだし、と遅ればせながら冬の王としての自覚を見せて会社に戻った

。

雪人からの通話が切れたスマートフォンを眺め、手代木は溜息をついた。

「仕方がないか、仕事だし。……無事に帰ってきてくれれば、それでよしとしよう」

席に戻った彼に、真結美が珈琲を差し出した。

「どうしたんですか？がっかりした顔をしていますけど」

「……恋人に用事が入って、一緒に帰れなくなっただけです」

少し愚痴っぽく言ってしまうと、真結美はくすっと笑った。

「手代木さんでも拗ねることがあるんですね。大人の余裕がいつもあるのに」

「まあ、久し振りだったので」

ガキっぽかったと頬を搔いていると「さっき断られちゃいましたけど、もう一回誘っていいですか？お食事」

真結美に言われ、手代木は少し考えた。

自分が隙さえ見せなければ、彼女も無理に押してこないと思うし、食事くらいいいのではないか。

雪人と一緒に帰れないことが殊の外堪えていた手代木は、軽くそんなことを考えて「あまり遅くならないなら」

と、誘いに乗った。

そこまでは良かったが、「……っつ」

食事に訪れたフレンチのレストランで、真結美の薦めで知らない種類の酒を飲んだら急に酔いが回った。

酒に酔ったことが数えるほどしかない手代木はこの変化について行けず、レストランを出てもまともに歩いているのが不思議なくらい前後不覚の状態に陥っていた。

「手代木さん、大丈夫ですか？」

真結美の声にも返答が出来ない。

いったい何の酒を飲まされたのかと思い返し、それが媚薬効果もありアルコール濃度が世界一に近いものだったと鈍い思考で辿り着いて啞然とした。

「……っ、狙ってたんですか……」

問いかけに、真結美は何のことでしょうかと妖しく笑った。

「私、この近くに家があるんです。休んでいきませんか？」

冗談じゃない。そう思ったが身体を支えられて動かされれば足がついて行ってしまう。

気がついた時にはもう真結美の部屋で、脱出しなければと思うも身体が言うことを利かない。

「大丈夫ですか？……服、脱ぎます？」

「やめてください……っ」

アルコールで鈍い反応しかしない思考が、だんだんと停止していく。

「手代木さんみたいな人を放っておく彼女さんなんて、失格だと思いませんか？私、ハッキリ言われないと諦めがつかない性格なんです」

そう言われて上着が脱がされ、独特の柔らかい重みが身体にかかってきて焦りが出る。

これでは浮気したと雪人に責められても、言い訳が出来る状態ではない。

彼氏がいるときっぱり断っていれば、真結美はここまで踏み込まれなかったはずだと昼間のことを後悔した時、「冷たいっ」

手代木にのしかかっていた真結美が声をあげた。

「な、なに……？手首……？」

のろのろと手首を見ると、以前神坂からもらい、あとから雪人が「お守りです」と言ってキスをしていたブレスレットから冷気が出ていた。冷気はそのまま手代木に伝わっていき、アルコールと媚薬で火照っていた身体を冷やし、思考を正常に戻した。

「退いてくれないかな」

女性を力づくでどうこうする主義ではない手代木は怒りを抑えながら、しかし声を低くして命じた。

怖ず怖ずと身を引く真結美を思わず睨み付ける。

「俺がきっぱり断らなかったのも悪いけど、あんたはもっと悪い。下手をすれば強姦だぞ」

危うく雪人以外と関係を持つ羽目になりかけ、自分の油断に反省しつつ、上着を着込む。

「俺は付き合ってる人がいる。性別は男。これでいいか？もう仕事以外で俺にかかわらないでくれ。私情で一切話しかけるな」

「……だ、だって、好きだったんだもん……」

めめそ泣き始める真結美を、手代木は冷ややかな目で見詰めた。元々が派手な美形だけに表情次第で何処までも冷たい雰囲気を出せる。

「好きだからって毎回こんなことしてるのかよ。呆れる。一夜限りの関係なんて、不毛だ」

「一夜限りじゃないかも知れないでしょ？相性が良かったら、せめてクリスマスまでは続くかも……」

「馬鹿か！」

思わず怒鳴った手代木に、真結美は身を竦ませた。

「身体の相性だけで付き合うなんてそれこそ馬鹿げてる。俺はそんなに軽い男じゃない。ふざけるな」

忌々しく吐き捨て背を向けると、真結美は本格的に泣き出した。手代木はこれ以上話すことも腹立たしいと部屋をあとにした。

「あー、久し振りに怒った」

秋の空を見上げ、怒りを落ち着かせるためにはいた息は未だ白くはない。

「雪嶋さん、先に帰ってたら申し訳ないことしたな。……今日は甘えたい気分だ」

未だ変な酒が残っているのだろうか。そもそもどうしてブレスレットが反応したのだろうかと思いに思いつきながら家につくと、案の定明かりがついていた。

「手代木さん、おかえ……あれ？」

玄関に顔を覗かせた雪人が無傷そうなので安心したが、自分を見詰める彼の顔が強張った。

「手代木さんにかけた加護が発動してる」

「かご？」

「……何か危険な目にでも遭ったんですか？怪我してませんか？」

真剣に訊かれたので、いったいどうしたのかと逆に問い返すと「手代木さんのブレスレットに、僕の魔力を吹き込んでおいたんです。もしあなたの身に、危険なことがあったら一度だけ、身を守るようにと。それが発動した形跡があるので、どうかしたのかと思って」

あの恥ずかしがり屋の雪人がブレスレットにキスをしていたのはそのためかと、手代木は感心した。

「危険ですか。……まあ、貞操の危機でしたね」

手代木は包み隠さず、真結美とのことを話した。恋人が自分以外と食事に行くことも嫌う人間がいると思い出し、雪人の反応を伺っていたが、「一緒に帰れなかった僕がいけないんだし。それに、そのお酒を頼んだ同僚の人が全部いけないんじゃないですか。それって常習者ですよ。手代木さんは悪くありません」

彼は案外あっさりした意見を述べた。

焼き餅を焼かれないのは、それはそれで男としては寂しいものだがと複雑な心境に陥っていると、部屋の中で何かが散っていた。

雪人は今、何も恥ずかしい思いをしていないはずだがと、手で散っているものを確認すると、水分量が限界までに達している雪だった。

これは以前、雪人の想いを確かめに彼の居城を目指していた時に降っていたものと似ていた。

今、雪人の心境を顕して降っているらしい。

手代木は恋人を後ろから抱き締めた。

「御免なさい」

「……なにがですか」

「雪人さんを泣かせました」

「泣いてませんよ」

「心は泣いてるでしょ。御免なさい、悲しませました」

雪人は嫉妬より切ない感情を抱いていた。手代木が他の女性と一緒にいたことが、悲しいのだ。

「僕は男で、人間じゃないから、いつか手代木さんが別れたって言っても、何も出来ない……っ」

「そんなこと言わない！」

慌てて雪人を自分の方に向かせると、彼は唇を噛み締めて泣き出すのを堪えていた。

彼はこういうひとだったと、手代木は自分の失態に気付いた。

雪人は、自分の性別や、ましてや人間ではないことにずっと引け目を感じていた。

わかっていたはずなのに、女性と一緒にいたと、たとえ被害を受けたとしても手代木が流されてしまうのではないかという怯えが雪人にはあったのだ。

相手は女性で、人間だから。雪人は恐れた。

「雪人さん。俺にはあなただけです」

手代木は雪人を抱き締めて囁いた。

「誰に訊かれても、あなたと付き合ってるってハッキリ言います。彼女には言いましたし。だから、そんな顔しないでください」

「ご、御免なさい……っ」

涙を流した雪人は、綺麗だった。真結美のものとは雲泥の差だ。

「これからクリスマスまで、ナンパが騒がしいと思うんですけど、俺は何があっても雪人さん一筋ですから」

安心してくださいとキスをした手代木に、雪人はくすぐったそうに泣き笑いになった。

「クリスマス、早く過ぎるといいですね」

心配性の恋人は、聖夜までは安心出来ないらしい。

その日、金融会社スチャラカぱらだいは暇をもてあましていた。客はなく、滞っている仕事もない。本業の方も順調。

社長の神坂築（カミサカキズク）はいつも通り、BLのドラマCDを聴いていた。経理の鷺沼智（サギヌマサトル）は仕事を片付けたので大学の課題をまとめている。受付の蘭林香（ランバヤシカオリ）は買ったばかりの雑誌に載っているファッションのチェック。人事の雪嶋雪人（ユキシマユキト）は大好きな羊羹を冷え切ったお茶で食べている。

取り立て担当の近江近衛（オウミコノエ）、遠藤円（エンドウマドカ）、御厨剣（ミクリヤツルギ）は次の標的の資料に目を通していたが、明らかに間延びしていた。

そんな、うららかな夕暮れのこと。

「……あれ？」

神坂が呟いたかと思うと、「ランラン、お茶の用意を」

告げたが早いか、自動ドアが開いた。

「困りにも困ってここの世話になるとはな」

「やあ、いらっしゃい。吟醸（ギンジョウ）」

立ち上がった神坂に、吟醸と呼ばれた青年は嫌そうな顔をした。

神坂の知り合いだと智は課題に戻ろうとしたが、「ぎ、吟さん！」

遠藤が持っていた書類を投げ出さんばかりに狼狽したのでそちらに目を向けた。いつも飄々としている彼らしくなく、何処か怯えているようにも見える。

「よう、円。久し振りだな。最後に会ったのは何年前だ？近衛のことは大事にしてるんだろうな」

「……俺も覚えてません。おうめのことは大事にしていますよ」

「ふん。俺がお膳立てしてやったんだから、当然だよな」

鼻を鳴らした吟醸は真っ白でふわふわそうな、緩い癖のある髪を掻き上げてきょとんとしている近江に笑いかけた。

「円に意地悪されたら俺に言うんだぞ？」

「エンちゃんは優しいです。吟さんが意地悪するとあとが大変なのでしちゃ駄目ですよ？」

「相変わらず可愛いな、お前は～」

近江の髪をくしゃくしゃと掻き混ぜた吟醸に、遠藤は複雑そうな視線を投げかける。この三人は何かあるのだなと取り残された神坂以外のものは思ったが、疑問を口にすると厄介になりそうなので黙っていた。

「感動の再会は別のところでやってよ。吟醸は用事があるからわざわざ来たんでしょ？元々、本社は京都にあるんだから」

「ああ。今、関東本部に出張しててな。そこでちょっと緊急事態が起きたんだ」

はあと溜息をつく吟醸の視線に智が留まった。

「あれ？人間？おい、人間がいるなんて聞いてないぞ」

「うん、殆どのやつが知らないと思うよ。俺の自慢の恋人だよ」

神坂が智自慢をしたいと目を輝かせるが、吟醸は察知して「おい、人間。あいつの話し相手になってやってくれないか。まあ、一眠りしてるから大丈夫だとは思うんだが」

遮って、誰かを心配そうに眉を寄せた。

「吟醸が誰かのために動くなんて珍しいね」

「ま、まあな。魔物と人間は仲良くしなきゃ、な」

取り敢えず俺の部屋で話がしたいんだが、と吟醸が言うので「僕も同伴ですよな」

智が荷物をたたみながら言うと、「そうだね。吟醸、料金は期待していてね」

神坂が笑いながら怖いことを言う。

スチャラカの一室にある巨大な鏡に吟醸が近付くと、金色の粉が飛び、鏡がスチャラカではない部屋を映し出した。

因みに粉は魔物によって違う。神坂は紅茶色よりの紅だし、遠藤は緑。近江は青、雪嶋は蒼、蘭林は茶、魔王陛下は漆黒だった。

「お邪魔します」

智が入ると、質素な部屋のベッドに誰かが眠っていた。

「吟醸。あの子、貴香（キカ）がするじゃないか」

「きか？」

智がオウム返しをすると、いつの間にかマスクをしている神坂は「貴香っていうのは、魔物には毒のような、媚薬のような恐ろしい香りなんだ。ある一定の年齢を超えた魔物の中で発現する特殊なもので、魔王陛下以外の魔物を狂わせる魔性のもの。人間でこの香りを持っているひとを見るのは初めてだよ」

小首を傾げながら溜息をつく。

「この子、食べられそうになってたの？」

「そうなんだよ。俺、今風邪引いてるから鼻が悪くてな。ほぼわからないんだが、危うく輪姦だった」

「ちょ。り、……って、そっちの意味の食べるなんですか」

「そうだよ。貴香の身体と交わるとこの上ない快樂が味わえるらしいんだよね」

でも俺は智だけだよ、と神坂が要らぬことを言うので智は思わずはたいた。その音が届いたのか、ベッドの上の青年が目覚めたようでゆらっと起き上がった。

「大丈夫か、カノン」

「ぎんさん……」

ベッドに座った吟醸はカノンと呼んだ青年の頬に触れて優しく微笑んだ。

「気持ち悪くないか？」

「平気です。眠ったらよくなりました」

「そうか。なら良かった。お前の体質を何とかしてくれる便利屋を呼んだからもう大丈夫だ」

「え？」

ぼんやりと智たちの方を見たカノンは「お、お見苦しいところを！は、初めまして。北条嘉

音（ハウジョウカノン）です」

縮こまって頭を下げる。

「初めまして。俺たちは通りすがりの便利屋です」

神坂がにこやかに笑いかけるのに従って智も会釈すると「なんか、格好良くて可愛い人たちですね」

嘉音は屈託なく笑顔を見せた。華が綻ぶというのを体現しているようで智は見取れてしまう。

「……カノン。笑顔の安売りするなよ。お前は俺だけを見てればいいんだ」

「何言ってるんですか。誤解されますよ」

「二人は付き合ってるんじゃないんですか？」

神坂が大袈裟に驚くと「いいえ。吟醸さんは僕の大学の時の先輩なんです。何かとお世話になっていて、良いお友達だけでそういう関係ではありません」

きっぱりと嘉音は言うが、吟醸が苦虫を潰したような顔をしているので、どうやらその関係には不満だと言うことが智にもわかった。神坂は肩を震わせて笑い出すのを堪えている。

そして、どうやら嘉音は吟醸が魔物だということを知らないらしい。そのつもりで話を持って行かなければならないということが察せられた。

「ちょっと身体に触らせてもらっていいですか？安心してください、俺は愛しい恋人がいるので絶対に変な真似はしません。触るのも服の上からですから」

「は、はい」

神坂が嘉音の口の中を見たり、目を覗き込んだり色々と作業している間、智は嘉音とちょっと話をしていた。

嘉音は現在プログラマーとして吟醸が社長をしている会社に出向していて、異変が起こったのはついさっきのことだったと言う。今日が誕生日の嘉音は生まれた時間だと言われている夕暮れ時になった瞬間、見知らぬ男女に襲われ服を剥がされかけ、あわや強姦といったところで吟醸が蹴散らし、貞操の危機を免れた。ショックで気を失った嘉音を吟醸は自分の部屋に運んだ、とのこと。

「吟醸さん、仕事の予定をずらしてこの部屋にいてくれてるんです。僕がしっかりしないって思うんですけど。情けないですよ。男なのに、襲われかけるとか」

「そんなことないですよ。力は個人差がありますし、いきなりで怖かったですでしょう？吟醸さんがいてくれて良かったですね」

智が言うと、嘉音はにこっとして頷いた。

綺麗な人だなあと、吟醸が惚れるのもわかると知らず納得してしまう。

「……ん。何とかかなりそうだ」

「そうなんです。良かったですね、北条さん」

智が安心していると、「吟醸。料金はこのくらいでいいよね」

神坂は携帯しているのか電卓を取り出して数字を吟醸に見せる。

盗み見た金額はとんでもない数字で、智は思わず嘉音の注意をそらした。

「ちょっと待て。お前、これはいくらなんでも！……このくらいはどうだ？」

「馬鹿じゃないの？好きな子の貞操が守れるんならこのくらい安いものでしょ。なに？吟醸の男気はこんなくらいも払えないくらい安っぽいの」

「……足下見やがって」

「吟醸の総資産と、嘉音くんへの入れ込み具合からしてもっと加算してもいいくらいだよ」

「お前、それ絶対に私情挟んでるだろ」

恨みがましい吟醸の視線を神坂はものともせず、「払うの？払わないの？」

守銭奴の顔で言う。

「くっそ。わかった。……俺が四六時中カノンのそばにいられるわけじゃねえし。払うしかない」

ぶつぶつ呟く吟醸が、智には不憫に思えた。

吟醸が呼んだ便利屋という神坂にお守りをもらった嘉音は襲われることもなく、日常を過ごしていた。

しかし、「決して周囲から注意を怠らないでください。鼻がいい連中は見抜くかも知れない」と、よくわからないことを言われていたので注意はしていた。

そんな嘉音はいつものように仕事を終え、会社をあとにして道を歩いていた。

心配性の吟醸は「俺、関東本部に戻ろうかな」

などと社長にあるまじきことを言い出すので笑ってあやした。

その吟醸が嘉音のお守りのために億もの金を神坂に払ったことを知るよしもない。

「ねえ、お兄さん」

声をかけられて振り返った嘉音は、不穏な気配を感じて思わず後ずさった。

「お兄さん、なんかいい匂いがするんだよね。どう？俺たちといいことしていかない？」

ただ、と思った。襲われた時、声をかけてきた男女と同じ目をしていると嘉音の警報が音を鳴らす。しかし怖くて動けない。

トラウマになっている暴行未遂を思い出して周りを囲まれても嘉音は何も出来ない。

息を飲むと、空から一枚、黒いものが降ってきた。

嘉音の頭に乗ったそれは、黒い名刺だった。

「……あれ？いなくなった」

「え？」

「おかしいな。うまそうな獲物がいたんだけど。幻影か？つまらねえ。行こうぜ」

男たちは次々と引き上げていき、嘉音は力なくヘナヘナと座り込んでしまった。

何故、彼らに自分は見えていないのだろう。そう思ったのは暫くしてからのことで、どうやら他の人間にも自分は見えなくなっているようだった。

「何が起ってるんだろう」

ふと頭に手をやって紙をとると、「……うわ！」

紙に引っ張られるように足が勝手に進んだ。

「ちょ、ちょっと！待って！待ってよっ！なに、なにっ？」

嘉音の大声に不思議がる人間はいても、誰も勝手に歩かされているとは思わず何もしてくれない。

「……もう、なんだよ……」

ゼーは一と息を切らして嘉音が辿り着いたところを見上げると「金融会社、スチャラカぱらだいます……」

ふざけた名前の会社が聳え立っていた。

「北条さん？」

「智くん……？」

コンビニの袋を持った智に声をかけられて嘉音は驚いた。その手にしている黒い名刺を見て、

智は眉を寄せる。

「また社長が何かしたんですね。済みません」

「え。なんのこと？」

「……取り敢えず、中にどうぞ」

通された嘉音は美形の社員たちを見て驚いたが、社員たちも彼の綺麗な顔立ちに驚いた。

「吟ちゃんが惚れるのも無理はねえな。別嬪さんだ」

御厨と名乗った男がにやっと笑い、「吟さんって以外と清楚系に弱いんですね」

遠藤という青年が嘉音をまじまじと見詰める。

「ようこそ、嘉音くん。やっぱり効果が切れましたか。試作品だったからあんまり期待していなかったけど、こうも早いとは」

神坂がにこやかに言う。ソファを勧められて腰掛けると「まあ、最善の対処法が見つかったので大丈夫ですよ」

と、襲われないためにどうすればいいのか、方法を嘉音にずばっと言った。

「……………」

嘉音はその場で失神した。

スチャラカに慌ててやってきた吟釀はソファで眠っている嘉音を引き取ると「築。お前、今度泣かすからな」

思い切り睨み付けてあとにした。

何を言われて気絶したのだろうか、ベッドで眠る嘉音の輪郭を気遣わしげになぞる。

吟釀が嘉音に出会ったのは大学の時、嘉音が新入生として自分のいた研究室に挨拶に来た時だった。

嘉音は柔らかい物腰だがしっかりしているし、何より所作が綺麗でいつも見取れてしまう。気がついたら恋をしていた。

しかし嘉音は気付かない。もどかしいが、人間の間では同性愛は未だ未だイレギュラーなので仕方がないのかも知れない。でも、いつか告白出来たら、と柄にもなく控えめなことを考えていたら、嘉音を狙うやつが現れた。

それも、ただ快樂のために嘉音を奪おうとしている。許せるものではないと、吟釀は関東本部への転勤を心の中で決意した。

「ん……」

「カノン」

呼びかけて、嘉音は自分を認識したらしいが、その白皙がみるみるうちに赤く染まった。

「ど、どうした。熱でもあるのか……？」

「違うんです。あの、……神坂さんに言われて……」

「あの野郎に何を言われた」

思わずむすつとしていると、「僕の体質を根本から治す方法なんですけど……」

嘉音は口ごもりながら、「吟釀さんと、その……しろって……。中に、だ、出されれば寄って

くる愚か者はいないって……」

そういうので、吟醸はあらゆることを考えた。

しっかり反芻して、「……あの、野郎……」

怒りに拳が震える。

つまり、神坂は嘉音に吟醸とセックスしろと言ったらしい。俄に神坂へ殺意がわいてくる。

自分が頑張って守ってきた嘉音との想いの均衡を、思い切り破ってくれたらしい。

確かに、吟醸は高位の魔物で、自分のものとわかればある程度の魔物は寄ってこない。それはわかっているが、神坂が言うのだから貴香の人間に対して自分との行為は物凄く有益だと言うこともわかった。

しかし、「嫌、だろ。俺なんかと、するのは……」

嘉音と出会う前、そして出会ってからも吟醸の下半身関係はだらしが無い。嘉音も少なからず知っている。

もとより男同士だし、嘉音にとっては嫌なはずだ。

「あいつに違う方法がないか、問い詰めてきてやるから心配するなよ」

莫大な金を支払わせておいてなんて言う対処をしてくれたんだと、吟醸は溜息をついたが「…
…いいです」

嘉音の小声を聞き逃しそうになった。

「僕、吟醸さんならいいです。こ、怖いけど……、優しく、してくれますよね」

恋した相手にそんなことを言われて、上目遣いに見られて、男の本能が騒がないはずはない。

「それは対処法としていいと思ってるんだよな。でも、……こんなことを言うと迷惑かも知れないけど、俺はお前が好きだから。こんな形で抱きたくない」

吟醸は嘉音の顔を見られなかった。

「知ってます。吟醸さんが僕のこと、好きだって」

「……………は？」

「か、神坂さんから聞きました」

「……………」

「思い返してみれば、なんだか僕って特別扱いされてる感じもしたし、納得する点もあったんです」

何も言えず、吟醸は黙った。

「僕も、吟醸さんのこと嫌いじゃない。好きだと思うので、……あの、今はそれじゃ、駄目ですか？」

恐る恐る言われて、吟醸は殺された気分になった。嘉音が可愛すぎる。

「まあ、今はそれでいいよ」

一方スチャラカでは、神坂がひたすら札束を数えていた。

「は？最初から対処法がわかっていた？」

「うん。嘉音くん、躊躇いそうだったからショック療法で吟醸を選ばせようと思って。どう？俺

って素晴らしいキューピットでしょう」

「死に神の癖に何言ってるんですか。と言うか、あくど過ぎで何も言えませんよ」

とは言え、神坂の一押しがなければ鈍そうな嘉音は吟醸のことなど一生気付かないだろうなとは思った。

「でも、吟醸さんはどうするんでしょう。魔物だと言うこと、言わないつもりなんですか」

「そこまでは知らないけど。吟醸も外見年齢はあれ以上進まないし、嘉音くんも不思議に思う時が来るからなあ」

「色々大変ですよ」

智は溜息をつく。

「まあ、未来のことなんて魔王陛下以外わからないさ」

取り敢えずお金数えるの手伝って、と言われて、智は嫌そうな顔をした。

お茶会とエピローグ

ここは人間の世界と魔物の世界の狭間。

歴代の魔王陛下がプライベートを過ごすために個人で所有している空間で、そこは中世の貴族が贅を凝らしたような城がひとつ、かまえられているだけだった。

「……陛下の居城も凄かったですけど、ここは眩しすぎてもはや驚きを通り越してますね」

鷺沼智（サギヌマサトル）は自分が十人いたところで天井には届かないだろう高さのそれを見上げながら、感歎と呟いた。

「ラフな格好でいって言うから、普通の格好にしてきたのに。完全に騙された。……ジーンズじゃなかっただけマシだろうか」

手代木篤志（テシロギアツシ）は場違いな自分に呆然としつつ、気後れしてしまうことを紙一重のところで踏み留まっている。

「この間来た時より意匠が増してないか、この壁」

屋敷徹（ヤシキトオル）はまるで芸術に頓着がなさそうな、無骨な見た目とは裏腹にヨーロッパ形式の優雅な細工がされている壁を入念に見ている。

「人間の方には珍しいですよ。ここは魔物随一と言われている専属のデザイナーが陛下の優美なお姿からインスピレーションを受けて設計されたのですよ」

三人の人間の案内をしているのはリヴィアン・イル・グラスという、人型の魔物だった。

彼は陛下の執事であるアルバートの妻らしく、忙しい夫に変わって役割を買って出ていると言う。しかし、「ああ、鷺沼さま。あまり僕に近寄らないように、お願いしますね」

「済みません」

リヴィアンは陛下とほぼ同じ「魔人型」という分類の魔物で、その魔力は「雷」に特化している特殊なタイプ。彼はアルバート以外の魔物には触れられないくらいの電気を常に放出しているため、人間の智など触れてしまえば立ち所に黒焦げになってしまう。

いいんですよ、と智に微笑みを浮かべる顔は寒気がするくらい美しいが、魔物の世界の電力が細身の彼一人で賄われていると思うと、説明を受けた人間たちは見かけにはよらないものとマジマジ感じてしまっていた。

「失礼します」

ノックのあとに告げたリヴィアンが扉を開けると、部屋から芳しい香りと優雅な音楽が心地よく聞こえてきた。

「リヴィアン、ご苦労だったな」

部屋の奥で玉座に座り、カップを傾けているのは魔王陛下で、アルバートがその傍らで給仕をしている。

「智、随分かったね。試験って大変なんだな」

紅茶色の瞳を気遣わしげに細め、スコーンを口にしているのは死に神の家のサラブレッドで智の恋人、神坂築（カミサカキズク）。本名はロードライト・イル・グラスィーアール。

「今日は五限まで試験があったから大変でしたよ」

智は神坂に招かれて隣に腰掛けた。あくまで五人がけソファの端である。

「手代木さんもお疲れ様です。済みません、迎えに行けなくて」

「いいえ。雪人さんは楽器が弾けるんですね」

「昔とったなんとやら、です……」

弦楽器の演奏を恋人に褒められて恥ずかしそうにしているのは雪嶋雪人（ユキシマユキト）。不良気味の「水」の魔人型の魔物の代わりに働いたり、冬の国では王として君臨しているが、本人は極めて低姿勢で気が弱い。本名はシリカ・イル・ネージュ。

「お前は、また血が足りないのか。まったく、飲んどけよ。魔王陛下の御前でだらしないな」

「黙れ。えさの分際で」

「いかちゃん、素直に徹くんの愛の籠もった生き血が飲みたかったって言えばいいのに」

「……貴様。くだらないことをほざくと消滅させるぞ」

ソファでぐったりしている小ヶ谷リイカ（オガヤリイカ）は苦笑する屋敷の首筋に牙を立てて吸血したが、嫌血鬼でもあるので直ぐに顔をしかめて珈琲で口直しをした。その様子を神坂に忍び笑いされてますます機嫌が悪くなったようだが、魔王陛下の前なので口を噤んでいる。本名はリイカ・イル・エタンソレイエ。

「おー、全員来たな。丁度菓子が焼き上がったから食べてくれ」

扉を開けるメイドたちに続いて入ってきた女王陛下、アイデアは人間の世界にいる時のようなレザーのライダースーツではなく、少しかしこまった装いをしている。普段が普段だけに、人間三人は「この人も一応貴族の魔物なんだな」と、アイデアには不本意極まりないような感想をそれぞれ持っていた。

今日、何故お茶会が催されたかと言うと、魔物の世界で新しい品種の茶葉が開発され、大のお茶好きである魔王陛下が一般にお目見えする前に一足先に試飲をするためであり、それに伴い新品种の茶葉に合うお茶請けの開発のためだった。更に、何故人間の三人が呼ばれたかと言うと、魔物たちは食べ物を食べる文化が発展しておらず、味覚が発達している魔物も少ない。市販するお茶菓子の全てを魔王陛下に食べさせるわけにもいかず、魔物を恋人に持ち精通しており、味覚も発達している彼らが魔王陛下と意見を交わしつつ、お茶菓子を吟味していくということだった。

「ふむ。これは甘すぎるな。お茶が甘めだからくどくなる」

「同感です。あと、こっちのタルトも甘すぎます。リンゴを使うならもっと甘みを抑えたタルトを作って食べてみたいですね」

「陛下、俺はこのクッキーはドライフルーツとか入れてみたらいいと思うんですよね。おい、いかちゃん。珈琲ばかり飲んでたらお腹が膨れるだろう」

「女王陛下が珈琲にも合うクッキーを所望しているので手伝っているんだ。邪魔をするな」

「ん～、珈琲とマシュマロって結構合いますよね。マシュマロクッキーとか、確か俺らの世界だとありましたよ」

「マシュマロか。珈琲には甘めのお菓子もありだよな」

「あれ？アルバートさま、この茶葉って蒸し時間がさっきと違いますよね。味が微妙に違いま

すよ」

「おや、申し訳ありませんシリカさま。煎れ直して参ります」

等々、お茶だけでなく珈琲の話も挟みながら時間を過ごしていく一同。リヴィアンが発電のために抜けてもお構いなく、時間が過ぎていく。

「それにしても、陛下はお茶に熱心ですよ。食べ物が必要としないのに、何故好きなんですか？」

アイデアが新しいお菓子のアイデアを書き始めたところで小休止になったのを見計らい、智が問いかけると、「昔な、人間の老婆のところに縁があって出向いたことがあったのだ」

もう数え切れないくらいカップを傾けていると言うのに未だに優雅な表情の陛下は口を開いた。

陛下がアイデアと出会う前のこと。

魔物を召喚しようとしている老婆がいた。当時、今ほど忙しくはなかった陛下は気紛れにその召喚に乗って現れ、老婆の願いを叶えることにした。

「私はてっきり、永遠の命だとか、世界の終焉などを臨まれるのかと思った。それほど古い先の短いものであった。しかし、彼女が望んだのはたったひとつ」

現れた魔王陛下を見て、彼女は言った。

「お茶に付き合ってくれないかしら」

陛下は彼女に従ってお茶に付き合った。その時、初めて口に含んだお茶はとても美味しかった。

「翌朝、死に神が老婆の命を狩ったので、私は二度とそのお茶が飲めなくなった。だが、忘れられなくてな。以来、飲む習慣がついてしまったのだ」

「ロマンチックだか～、なんだか～、よくわからない話ですね～」

神坂が間延びした声で言うと、「アイデアが嫉妬をするからあれの前では言うなよ、皆のもの」

魔王陛下は何処吹く風で愛妻の手作りクッキーを頬張った。

「アイデア陛下って嫉妬深い。けど……雪人さん、御免なさい。俺、ちょっとだけ気持ちが変わります」

「え。手代木さん、女王陛下の嫉妬深さは魔物の世界でも指折りですよ。わかっちゃ駄目です」

青くなる雪人に手代木は頬を搔く。

「俺も女王陛下の気持ちがわかるな。自分以外との思い出を想いながらお茶しているようなものじゃん」

「……それでは私が浮気をしているような言い方になるな」

「そういうことではないんですけど～。いやそうかな～？智が魔王陛下みたいなことしてたら、俺はもやもやって」

「あのねえ。嫉妬は醜いですよ、社長」

白い目で恋人を見る智に「本当にな」

小ヶ谷は同意するが、「……俺だって嫉妬しないわけじゃないぞ」

屋敷が小さな小さな声で低く呟くので、恋人の思わぬ一面に咳払いをして赤くなる頬を擦った

。

場に、微妙な沈黙が落ちた時、「お待たせ～、今度は主食にもなりそうな菓子にしたぜ」
アイデアがメイドを引き連れてやってきたので、全員救われた気分になった。

「ん？旦那さん、どうかしたのか？」

「.....私のお茶に対する想いは、お前への想いよりは軽いぞ？」

「うん？当たり前じゃないの、それ」

今更だろうと不思議そうな顔をするアイデアの頬に、魔王陛下はキスを落とした。

「またいつか、貴方とお茶が出来ればいいわね」

初めましての方も、そうではない方も、こんにちは。牡丹えびです

今回は「黒い名刺に気を付けろ！」の第三弾【短編集】に目を通していただき有り難う御座います

目に留まっただけでも嬉しいのに、この頁を読んでくださるとは！……あまり気合いが入っていないこの頁なのですが、最後までお付き合いください

第三弾ということで、前に出している【社員編】と【バイト編】を既読していないとややわからない点があるかも知れません

その点は気合いで乗り切ってくださいればいいかなあと

では、書いた順番に個別の感想を後書きと代えさせていただきます

・魔王様の恋愛事情

このシリーズの中でえびが一番好きな人物は魔王陛下です。彼には名前がありますが、今回は出てきていません

名前、と言うと今回は神坂の本名やアイデアたち魔物の名前もたくさん出てきましたね

話を戻すと、今回は魔物の中で最強の彼の恋の話です。何でも知っているようで、実は幼稚園児すら知っているような恋の感情について知らない彼が、結婚後にいかにして恋を知るのか

主役の性質上、あまり冷静さに欠いた文章にはしないように心がけたつもりです

女王アイデアは感情的な魔物ですが、魔王陛下はおっとりとしていてどちらかと言えば草食動物のような男性です

当て馬の魔物が可哀想だなあと思ったのですが、みんな魔王陛下ラブなので笑って許してくれることだと思います

・突然の求婚者は身内

雪嶋と手代木の話でした。くっついてから何が変わったって、甘さも変わりましたが、手代木の雪嶋に対する呼び方ですね

えびは個人的には「雪人」ではなく「雪嶋」と呼んでいるので書いていてとてつもない違和感があり、何度も書き間違いをしました

今回、初登場だった雪嶋の弟は元ひ弱の根暗です。折角お兄さんのために一念発起したのにちと遅かったようです。彼の外見は手代木に似ているだろうなあと勝手に想像してから生まれたこのお話でしたが、男前の度合いからすると手代木に軍配をあげてしまいました

まさか結婚させるわけにはいかないですからね

因みに、今回は出ていない雪嶋の妹の日本人名は恐らく深雪（ミユキ）だと思います

・憂いの国にて

【バイト編】で初登場した小ヶ谷と屋敷の話だったのですが、小ヶ谷と元カノの話になってし

まいました

と、あっさり片付け過ぎですね

実を言うと、個人的にはこの話が今回の短編集では一番好きですし、力を入れました
絵で表すと劇画と言うか、少し大袈裟な台詞回しがある話なので、好みが分かれると思います
小ヶ谷と恋人の惨劇が主な話の軸なのですが、その中にどれだけ彼が屋敷を想っているかを出せるかが勝負ではないかと思って書き上げました

屋敷も饒舌な方ではないのですが、小ヶ谷も無口な方で、普段から思いの丈というものは口にはしません

えびとしても動かしにくいとは思っていたのですが、彼の「リイカ」という名前はえびがゲーム上でよく使う名前、愛着があってその名前を冠した彼にも愛着があるので渋る小ヶ谷をわざわざ引っ張り出して喋らせた感じです

最後の方で小ヶ谷がちょっと浮気チックなキスをしています、えびの許容範囲だったので切らずに載せました

その後のユークレスクがちょっと気になります

・溺愛死神

ああ、もうこれは完全に神坂変態説を裏付ける話と言っても過言ではありませんね
書いているのはえびなのですが

「バイト編」の時に神坂は格好良いのですよ的なことを書いてはいたのですが、これだけ読むとただの変態+恋人馬鹿になってしまいますね

神坂の妄想はまさにファンタジー。本文にもありますが、実際にやったら犯罪ですし、捕まりますし、色々な意味で終わってます

でも書いていて楽しかった……

神坂の変身については突っ込みどころが満載でしょうが、堪えていただきたいです

もう彼、必死なんです

智ラブで仕方がなくてなんだってしている状況なんです

普段は厳しい智も今回は何故か甘かったですね

・クリスマスまでの受難

また雪嶋たちの話に戻りますが、主に手代木の話になります

本当にモテる男は危険を察知出来るいい男、と思うのですが手代木は未だ未だ甘いです
肉食系の女子と渡り合ってはきた彼ですが、今回は不覚をとります

まあ、ここまでやる女性っていないと思いますよ

えびの周りには残念ながらいるのですが

一方、雪嶋の不安も添えておきました。付き合う上でどうしても出てきてしまうものをいつかは書きたいと思っていたので、いい機会だなあと思いました

これが発行されている時はクリスマスまで本当に二ヶ月くらいですね

ホワイトクリスマス、雪嶋が呼んでくれるでしょうか

・貴香の恋人

シリーズの番外編の番外編。ほぼ関係のない話になりましたが、キャラ的には書きたかったので書いてしまったと

本来ならばプライベートに載せるべき裏話のようなものなのですが、前後編になってしまったので掲載することにしました

吟醸は何の魔物なのか、遠藤とどんな関係なのか。謎が残りましたが後々何処かで書ければと嘉音ですが、どちらかと言うと色気美人を目指した当初の思惑を見事に外しました。清楚要員です

スチャラカにかかわった三人目の人間ですね

濁してありますが、色々やっていますよ

・お茶会とエピローグ

この後書きを書いている日（九月三十日）に書いた話です

【黒い名刺】シリーズのエピローグ的な、でも全キャラクターは出ていないし、リヴィアンという新しいキャラ（プライベートでは後々出てきます）も出ていて、エピローグとは言いがたい内容ですが、この話でこの短編集が終わりなので「エピローグ」という言葉を入れました

初めが魔王陛下の話だったので×も彼の話になりました

小ヶ谷とユークレスク同様に、陛下と老婆の話もちょっと絵になるかも、とか考えてました後味のいい話になっていればなあと、思っています

さて、このようなとりとめもない後書きになってしまって申し訳ないです

そして、今回でこのシリーズはいったん終了となります

次回の無料配信小説は新しい主人公たちでお送りしたいと思っています

でも、ご感想などいただけたらひょっこり現れるかも

未だコメントとかいただけしていないのですよ～

あと、今年の配信小説はこれにて終了となります

有料配信が一冊で終わってしまったのは残念なのです

実は以前より不調だった首の状態が悪化の一途を辿ってしまっていて、PCに長時間向かえない状況です

そして、「どうして小説を書くのか」という根本的なことを少し考えています

年明け、小説は出せるものが書けたらなあとと思うのですが.....

構想はあるのですが、思い通りに書けるかが不安で尻込みしています

一太郎くん（えびが使用している文章制作ソフト）も新調したんですけどね。二〇〇七を思い切って三〇周年記念バージョンに！

休養中もツイッター（@buttonebi）で根暗なことを呟いたり、プライベートにこのシリーズ

の小説を掲載（主にフォロワーさん限定です）したりしますので覗いていただけると嬉しいです
物凄く早いですが、良い年をお過ごしください
来年も宜しく願いいたします

美味しいものを食べすぎて免許証の更新する際に必要な写真の顔がヤバいことになっていた、
牡丹えびでした：二〇一五年九月三十日